

日本慈濟世界

日本ツーチーセカイ

2024年10月10日出版

第187期

能登震災見舞金配布 特別号（下巻）



五年前，莫三比克遭遇了伊代風災，無數的房屋和校舍被摧毀。當時有十八位莫三比克的本土志工，分別拿了鍋鏟、鋤頭、竹筒和我的相片（《靜思語》等等，長途跋涉到遠在一千多公里外的中部災區，下定決心在那裡定居，開闢農場協助當地民衆。至今他們已經帶動了數千位志工菩薩，耕耘那一大片土地。

他們認真耕作，將菜畦種植得很好，看一顆顆高麗菜長得大又飽滿，實在令人感動；還有腰果樹，幾年後應該也會開花結果，成長茂盛。除了農耕之外，還打造了莊嚴美好的村莊，他們發心立志的大願力，都展現在這個地方，既有努力付出的收穫，也有辛勤揮汗的成果。

風災過後，慈濟為災區援建許多

大愛村和中小學，如今也陸續完工。在啟用典禮上，許多長官專程前來，肯定慈濟為鄉親所做的好事。感恩營建同仁與志工們，懷抱使命用心投入，堪得磨、堪得忍耐，即使非洲天氣炎熱，他們這幾年來依然願意守護當地，將村莊和學校一步步建蓋起來；而且建築很莊嚴、很整齊，像是一盞盞燈籠，點亮了原本黑暗的大地，相信大家都有成就感。

其中，莫凡比斯中學是莫三比克最大的高中，當這間學校的燈光亮起那一刻，我的心是多麼歡喜啊！歡喜的是孩子們有書可讀，能夠得到良好的教育，國家要栽培人才有希望了。相信幾年後，大愛村會是莫三比克最真、最善、最美的村莊，民衆能在此安居樂業，改變過去不好的習慣，成就不於不酒、人人茹素的模範村。

感恩岱霖和迪諾這一對夫妻，十年來在莫三比克不斷接引，總是一念正向，就步步落實、身體力行，要翻轉莫三比克，很有希望。期待其他國度的慈濟人，也能為善競爭，造福各個地方的人群。

大地不動，是我們的殷勤精進來成就一切好事；凡事要成就，不能只是夢想，要有心願、有力行。付出無所求，做得很開心、有成就感，這不正是回饋給我們的信心與價值嗎？菩薩來人間就是要救度苦難，希望我們能將這分精神落實在人間，把覺悟的智慧、菩薩的大愛傳給每個人。所以還要不斷勉勵志工們殷勤精進，傳揚慈濟的精神，啟發大家的愛心，互相幫助，將人間變成淨土。



正念向前，步步落實

《日程表》

2024年

十一月 November

◎東京23区 ◎関西地区 ◎群馬地区 ◎山梨地区

日	月	火	水	木	金	土
			(読) 仏典系列 13:30-15:30	写経 13:30-15:30	1	2
3文化の日	4振替休日 代々木炊き出し配布 9:30集合	5	6(読) 仏典系列 13:30-15:30	7写経 13:30-15:30 甲子園写経教室 13:00-15:00	8	9料理教室 (尼崎) 10:00-17:00
10清掃活動 中国語子供クラス 09:00-12:00 中国語大人クラス 13:00-15:00 大阪西成区炊き出し・夜回り 14:00-18:30	11	12大愛食堂お便當配布 16:30-18:30	13(読) 仏典系列 13:30-15:30	14写経 13:30-15:30	15	16
17ボランティア研修 ボランティア研修 09:00-17:00	18代々木炊き出し配布 9:30集合	19	20(読) 仏典系列 13:30-15:30	21写経 13:30-15:30 甲子園写経教室 13:00-15:00	22(読経)《慈悲三昧水懺》 ※20:15-22:00	23勤労感謝の日 (読経)《慈悲三昧水懺》 ※20:15-22:00 大阪西成区夜回り 16:30-17:30
24(読経)《薬師経》※10:30-12:30 (読経)《薬師経》※10:30-12:30 中国語大人クラス 13:00-15:00 (読経)《慈悲三昧水懺》 ※20:15-22:00 料理教室 (枚方) 10:00-15:00	25うらら障礙者昼食 交流 10:00-13:00	26大愛食堂お便當配布 16:30-18:30	27	28	29	30

十二月 December

◎東京23区 ◎関西地区 ◎群馬地区 ◎山梨地区

日	月	火	水	木	金	土
1清掃活動 中国語子供クラス 09:00-12:00 中国語大人クラス 13:00-15:00 大阪西成区冬期物資配布 16:00-18:00	2代々木炊き出し配布 9:30集合	3	4	5写経 13:30-15:30	6	7
8中国語子供クラス 10:00-12:00 中国語大人クラス 13:00-15:00 大阪西成区炊き出し・夜回り 14:00-18:30 料理教室 (枚方) 10:00-15:00	9	10	11(読) 仏典系列 13:30-15:30	12	13	14慈善団樂火鍋 12:00-14:00 料理教室 (尼崎冬至) 10:00-17:00
15中国語子供クラス 10:00-12:00	16代々木炊き出し配布 9:30集合	17	18(読) 仏典系列 13:30-15:30	19写経 13:30-15:30 甲子園写経教室 13:00-15:00	20	21
22	23	24(読経)《薬師経》 ※10:30-12:30 (読経)《薬師経》 ※10:30-12:30	25(読) 仏典系列 13:30-15:30	26	27(読経)《地藏経》 ※20:15-22:00	28(読経)《地藏経》 ※20:15-22:00
29(読経)《地藏経》 ※20:15-22:00	30	31				

※(読経)→下記ウェブサイトリンクよりご視聴ください。 <https://connect.tzuchi.im/dharma/>

(読)→読書会

*上記表は予定が変更になる場合がありますので、参加する前に必ず事務局までお問い合わせ下さい。



正しい思いで前向きに 一歩一歩進みましょう

訳／金子昭

五年前、モザンビークでは巨大サイクロンが襲来して、多くの家屋や校舎が倒壊しました。当時十八人のモザンビークの現地ボランティアは、それぞれに料理器具や農具類をかつぎ、また竹筒や私の写真、『静思語』などを持って、長い道のりを千キロも離れた中部の被災地に向かいました。そして、そこに住まいを定め、農場を開いて現地の人々を支援していくことに決めました。今では、彼らはすでに数千人のボランティアたちを伴い、広大な土地を耕作しています。

彼らは真面目に畑を耕し、野菜畑に植えた種は良質のもので、キャベツは一つ一つが大きく実り、それは感動的なものでした。またカシウーナツツの木は、何年か後には花も咲

いて、よく実るようになるでしょう。農業だけではありません。彼らは立派で美しい村を作り上げました。彼らの発心と立志の大きな願いは、今の地域で大きく開花しました。それは、彼らが努力して得た収穫であり、また汗をかいて頑張った成果でもあります。

サイクロンの後、慈済は被災地のために多くの大愛村や小中学校を建設し、今もなお次々と完成しています。使い初めの式典では、多くの政府高官がわざわざそこに出席してこられ、慈済が地元のために行った善行を認めていただきました。建築にあたった人々やボランティアの皆さんには感謝申し上げます。彼らは使命を持って心して尽力して困難に耐え、どんなに炎暑なアフリカの気候

であっても、何年間も現地を支援しようという心を決め、村や学校を着実に作り上げてきました。これらは立派で整然たる建築です。その姿は、まるで一つ一つの灯籠が暗闇の大地を照らし出しているかのようです。人々が皆これに達成感を抱いたことと、私は信じています。

その中でも、マファンビス中学はモザンビークで一番大きな学校です。この学校に灯火がともるのを見ると、私の心は大きな喜びに満たされました。喜ばしいのは、子どもたちが勉強する本があつて、良い教育を十分に受けられるということです。国が人材を育成する希望があります。何年か後には、大愛村はモザンビークでは真善美を兼ね備えた素晴らしい村になるでしょう。人々も

また安定した暮らしを営むことができ、過去の悪しき習慣を改め、禁酒禁煙を達成して、だれもが菜食する模範的な村になるであります。

ダイリンとディノのご夫妻にはとても感謝しています。この十年間というもの、お二人はモザンビークでたえず人々に働きかけ、常にまっすぐ正しい方向を向いて、一歩ずつ着実に歩み、力を尽くしてモザンビークを変えようとしてこられました。他の国の慈済人におかれても、善のための競争を行い、それぞれの地域での人々の幸せを作ってください。ことを強く願っています。

大地は揺るぎないものです。これは、私たちが真剣に精進すれば、どんな善事も達成できるということなのです。したがって、いかなることも達成すべきです。ただ夢を見るだけではだめで、心に願いを持ち、力を尽くすことが大切なのです。尽力して求めることがなければ心も晴れやかで、そこに達成感も生れます。

これはまさに、私たちの信心と価値への見返りなのではないでしょうか。菩薩はこの世に現われて苦難を救います。この菩薩の精神をこの世で確固たるものとし、悟りの知恵を得て、その大きな愛を一人ひとりに伝えていって頂きたいものです。それ

れゆえ、ボランティアの皆さんには今以上に、勤勉に精進を重ね、慈済の精神を宣揚し、人々の愛の心を啓発して互いに助け合うよう、お願いしたいと思います。それが実現するならば、この世はまさに浄土となるであります。

梅子昭



■ 2019年のイタイサイクロンで大きな被害を受けたモザンビークのソファラ州ドンド郡。慈済が支援して建てたモファンビス中学校の開校式と引き渡し式が、1月31日に行われました。式典には多くの人々が集まり、学校は活気に満ち溢れていました。写真/Ezra Millise



2024 年 10 月 10 日発行 187 号

発行人：釋證嚴

発行所：台灣佛教慈濟慈善事業基金會 日本分會

編集メンバー：

許麗香 張秀民 陳靜慧 王秀寧
陳詩萍 小野雅子 吉本富美 黃韻璇
王姿文 簡毓嫻 張濟梅 莊雅婷
滝吉道信 池田浩一 慈 涓

《上記以外のご協力の方にも感謝致します》

住所：〒169-0072
東京都新宿区大久保 1-2-16

電話：03-3203-5651

FAX：03-3203-5674

E-MAIL：tzuchi@tzuchi.jp

郵便口座：00190-4-753352

口座名義：仏教慈濟基金会
ブッキョウジサイキキンカイ

時間：毎日 9:00 - 17:00

HP：http://tw.tzuchi.org/jp（日本）

HP：http://www.tzuchi.org.tw（台湾）

いつも「日本慈濟世界」にご支援頂き有難うございます。これからもご協力下さいますよう、宜しく願ひ致します。



【日本慈濟世界】
ホームページ

CONTENTS



表紙写真：

慈濟基金会は 2024 年 5 月から 9 月にかけて 5 回に渡る見舞金給付活動を無事に終了しました。そして、現地市役所のご協力により、円滑に作業を終えることが出来ました。日本から台湾からもボランティアが参加し、国籍や年齢に関係なく、心を一つにしてこの愛と祝福を被災した地域の方々に直接お届けしました。写真：珠洲市の飯田わくわくひろばの様子。

写真 / 蔡鳳寶

上人開示（證嚴法師の教え）

01 正念向前 歩歩落實

釋證嚴

02 正しい思いで前向きに
一步一步進みましょう

金子昭

訳

能登賑災報導第四梯次（能登震災報道第四回）

06 能登半島地震見舞金配布一覽表

07 二〇二四年能登半島地震援助大事記

張秀民

10 臺灣團行前集訓 重災區致哀默禱

日本雙月刊團隊整理

40 台灣チーム出発前の訓重災地に哀悼の祈り

朱家成

訳

12 愛在珠洲發放時 一杯茶水一分情

日本分會整理

43 珠洲での支援金配布の時
一杯のお茶に込められた思い

岩村益典

訳

15 見舞金傳遞愛 真情關懷伴重建

日本分會整理

34 見舞金で愛を伝え誠心のケアで再建支援

岩村益典

訳

18 金澤工業大學助學見舞金發放
點燃學生心希望

日本雙月刊團隊整理

53 金沢工業大學獎學見舞金の配布
學生たち希望の光を

洪秀瑩

訳

19 慈濟咖啡屋圓滿任務
役目を果たす慈濟カフェ

日本雙月刊團隊整理

56 役目を果たす慈濟カフェ

鄭文秀

訳

20 穴水町二次發放 鄉親志工心手相連

日本雙月刊團隊整理

54 穴水町二次發放

洪秀瑩

訳

21 能登町二次發放町長致贈感謝狀
住民とボランティアが心を合わせて

日本雙月刊團隊整理

55 能登町での二次配布町長から感謝狀贈呈

邵世軒

訳

志工故事（ボランティア物語）

30 代代相傳以誠以情膚慰一

日本雙月刊團隊整理

67 代々伝わる以誠以情膚慰一

朱家成

訳

33 慈濟鄉親關懷見證有愛不孤單二

日本雙月刊團隊整理

70 被災者に寄り添います そこには
愛が有り孤独では有りません二

真鍋誠

訳

37 展現竹筒歲月精神 佈善種子散播愛三

日本雙月刊團隊整理

74 「竹筒の歲月」の精神を顕現し善の種が
播く愛を広がる三

王曉紅

訳

日程表

二〇二四年十一月・十二月行事曆

王昆京



2024 年能登半島地震援助大事記

整理 / 張秀民

◎ 0101

能登半島で M7.6 の大地震が発生、甚大な被害がでました。

◎ 0102-0108

上人はいち早く励ましの言葉をかけるとともに、連日、救援の指示を出しました。

◎ 0105

先発隊 4 名が七尾市と穴水町へ向かい災害状況を視察、国立七尾病院勤務の陳文筆医師、公立穴水総合病院の島中院長ほか関係者を訪ね、被災地の現状について話を伺いました。

◎ 0111

穴水町へ出向き、炊き出しとして温かい食事の提供を打診し、さらに陳文筆医師からの紹介により中能登町宮下町長と会見、慈濟活動拠点として古民家『御祖之郷』の無償提供を頂きました。

◎ 0113

穴水町「さわやか交流館プルート」において炊き出しとして温かい食事の提供を実施、さらに、穴水総合病院にても提供を開始、ボランティアが交代で調理を担当、地域住民の心身を温めました。

◎ 0113-0129

第 1 回炊き出し、273 名のボランティアが厳しい寒さの中、穴水町「さわやか交流館プルート」と穴水総合病院にて 17 日間、7,129 食の温かい食事を提供しました。

◎ 0125

「復興には時間がかかる」との上人からの言葉を受け、温かい食事の提供を継続。さらに地元住民へ「仕事をもって支援に代える」有償ボランティアという形で調理作業に携わってもらことを提案した。

◎ 0208

慈濟本部よりエコ毛布、ショール、マフラー等の支援物資到着

◎ 0215

「有償ボランティア」での温かい食事を作るボランティア活動に協力頂ける地元女性の方々へ具体的内容を説明、病院内に提供された小さなスペースを清掃し「慈濟珈琲屋」を開設する準備を進めました。

◎ 0216-0329

穴水総合病院において、避難されていた方々や医療従事者の方々、在中していた JMAT（日本医師会災害医療チーム）の方々へ、43 日間に亘り温かい食事 5,968 食を提供する炊き出し活動を実施しました。この活動には、356 名のボランティアが参加し、支援に貢献しました。

能登半島地震見舞金配布

20240517-0901 までの集計
延べ1,437人のボランティアが動員

配布対象:

- 住宅が半壊以上
- 世帯構成員の中に65歳以上の方がいる世帯に対し
- 1人¥130,000
- 2-3人¥150,000
- 4人以上¥17,0000





珠州市 2,907 世帯、志賀町 2,160 世帯を対象に配布、のべ 385 名のボランティアが参加しました。

◎ 0714 第 4 回見舞金配布（能登町 2 回目）
170 世帯を対象に 2 度目の見舞金配布を実施、この活動に 7 名のボランティアが参加しました。

◎ 0716 第 4 回見舞金配布（穴水町 2 回目）
さわやか交流館ブルートにおいて 83 世帯に配布、この活動には 25 名のボランティアが参加しました。

◎ 0717 金沢工業大学において 48 名の学生に助成金支給、この活動には 26 名のボランティアが参加しました。

◎ 0726 能登町の大森凡世町長より、慈濟への感謝状が贈られました。

◎ 0830-0901 第 5 回の見舞金配布（七尾市）
3,240 世帯を対象に配布、3 日間でのべ 288 名のボランティアが参加しました。

◎ 0831 第 5 回の見舞金配布（輪島市 2 回目、志賀町 2 回目）
輪島市 300 世帯、志賀町 137 世帯を対象に配布、それぞれ、24 名、7 名のボランティアが参加しました。

◎ 0901 第 5 回の見舞金配布（珠州市 2 回目、中能登町 2 回目）
珠州市で 285 世帯、中能登町で 50 世帯を対象に配布、それぞれ 23 名と 6 名のボランティアが参加しました。

◎ 0921 能登半島で大規模水害が発生、先発隊が輪島市役所を訪問し今後の支援について協議しました

◎ 0928 水害支援チーム A 班は修田勝好さんの水田を、B 班は多賀幸利さんの水田の復旧作業を手伝いました。

◎ 1003 水害支援チームは、輪島塗職人の鮎井辰也さんの工房で大切な道具の救出作業を行いました。絶望していた鮎井さんも慈濟の温かい支援に笑顔を取り戻しました。

◎ 1007 限られた人数での支援活動隊でしたが一人ひとりが力を合わせ、高齢者の方々へ尽力しました。地震や洪水という大きな災害に見舞われても、慈濟の愛と温かい支援は常に人々の心に寄り添っています。

◎ 0216-0725 「慈濟カフェ」を 6 か月間開設、133 日間で 1 万杯以上を提供しました。静思茶、ココア、コーヒーを無償提供し、皆さまに心の安らぎを与えながら、地域コミュニティの中心となる場所を目指しました。

◎ 0725 「慈濟カフェ」最終日には島中院長をはじめとする病院スタッフから感謝状をいただきました。カフェで集まった募金 104,028 円は病院の復興基金として寄付されました。

◎ 0318 穴水総合病院の看護師である南里美さんは、慈濟が長期に亘って活動続けるための拠点として自宅を提供、本人は離れて生活しながら慈濟ボランティアとして活動を始めました。

◎ 0403 見舞金配布活動検討の中、花蓮で M7.2 の地震が発生、一部の市町村から見舞金辞退の申し出があるも、證嚴法師の「約束は必ず守る」という強い信念の元、国際的支援を基盤に予定通り見舞金支給を決断、対象を住宅半壊以上、65 歳以上の高齢者と世帯を同じくするとして、5 月から見舞金支給開始を決定しました。これは被災地の皆さまへの慈濟の変わらぬ思いの表れです。

◎ 0517-0519 第 1 回の見舞金配布（穴水町）
1,180 世帯を対象に実施、のべ 252 名のボランティアが参加しました。住民の方々から「台湾も被災しているのに、私たちを支援してくださり、本当に感謝しています」と温かいお言葉をいただきました。

◎ 0603-0605 慈濟本會の支援賑災団 団長の黄思賢氏、謝景貴氏らが日本を訪れ、珠州市の副市長と会談し、7 月の見舞金配布実現に繋がりました。

◎ 0607-0609 第 2 回の見舞金配布（能登町）
898 世帯を対象に配布、のべ 183 名のボランティアが参加しました。

◎ 0628 中能登町町長は、台湾花蓮地震の被災者支援として地元で募金活動を行いました。そして、第 3 回の見舞金配布の支給を前に、慈濟基金会 謝景貴と許麗香執行長へ募金贈呈が行われました。

◎ 0628-0630 第 3 回の見舞金配布（輪島市、中能登町）
輪島市 4,193 世帯、中能登町 736 世帯を対象に配布、のべ 288 名のボランティアが参加しました。

◎ 0712 慈濟基金会 顏博文執行長が能登を訪れました。

◎ 0713-0715 第 4 回見舞金配布（珠州市、志賀町）



■ 巡訪正院町，領隊林仲堯師兄（拿旗幟者）帶領志工以虔誠之心向地震受難者默哀祝禱，祈願亡者靈安，生者心安。攝影／顏福江

1 能登賑災 ◆ 見舞金發放第四梯次

臺灣團行前集訓 重災區致哀默禱

撰文／日本分會雙月刊團隊整理

（文稿提供／朱秀蓮・周利貞・孫素秋・楊雅穎・蔡鳳寶・施金魚）

慈濟「日本能登地震見舞金第四梯發放」，於七月十三至十五日展開，臺灣赴日支援的二十一位團員從北中南東各地，於七月十一日中午齊聚桃園靜思堂集訓共修。除了要對賑災發放之行的各項事宜有清楚的了解外，更重要的是凝聚共識，建立行住坐臥各方面儀式的默契，以展現慈濟團體人文之美。

凝聚共識 展現人文之美

此行，由桃園區資深志工林仲堯擔任領隊，他叮囑大家珍惜殊勝因緣，幫上人多看看聽、多付出關懷，並將所看到的記錄下來。他親自示範正確問訊禮，再請團員實際演練：「團體行動代表慈濟，行儀要整齊畫一，用赤誠之心，將人文之美展露於外。」

宗教處海外事務室副主任林裴菲指出，自元日地震發生至今已超過半年，災區現況復原緩慢。透過大愛新聞的報導，讓團

員更了解慈濟災後，從熱食提供到見舞金發放的一波波援助行動。

三天發放 將超過五千戶

宗教處同仁周利貞則就第四梯見舞金發放地點珠洲市與志賀町，進行發放場地及流程的說明，並詳述交通行進路線、入住守則。這次分兩個動線，一個動線到北方震央的珠洲市，發放地點在飯田 Moku Moku 廣場；另一個動線在南方的志賀町，分二處發放點——富來活性化中心和志賀町文化館。三天的發放，預計發放見舞金超過五千戶。

發放之前 探訪珠洲市

位於能登半島最北端的珠洲市，是此次大地震的重災區，該市的寶立町和正院町，災情可說是重中之重。因此七月十二日（發放開始前一天）志工們分秒必爭，透過親身訪察地震後災

區現況，思考能為鄉親再多做些什麼。

志工搭乘的大巴士順利抵達珠洲市正院町公民館，館長小町康夫親自迎接。他表示，今天正式結束避難所的任務。從一月一日到七月十二日，總共是一百九十四天。

所求不多 安身立命而已

七十六歲的濱木滿意先生，

帶領志工走訪「正院町」災區。他表示：「這裡多是高齡長輩，大家每天三餐能夠溫飽，就感到滿足了。」單純的心要的不多，但求日子還能過下去。

看到正院町的斷垣殘瓦，大家心情不免有些沉重。領隊林仲堯帶領志工以虔誠之心，合十向地震受難者默哀祝禱，祈願亡者靈安，生者心安。

濱木滿意感動地說：「大家有這樣子的宗教心，對往生者的

一分心念，很感恩臺灣的人，有這種為往生者祈福的一分心意。」

同理受災 鼓舞鄉親們

第一站進入「寶立町」災區。伴隨地震而來的火災和海嘯，造成屋舍嚴重毀損，讓人看了非常不捨。半壞以上的房屋可以申請公費解體，但當地缺工，還能居住的屋舍有限，清除作業顯得相當緩慢。當地高齡長輩多住在組

合屋裡，因他們不好意思打擾兒女。「期勉大家同理感受居民受災的心情。」志工謝景貴語重心長表示。

災區滿目瘡痍的景象，令第一次參與慈濟國際賑災的人文志業中心林天來顧問，不禁眼眶泛紅。親眼見證慈濟在賑災發放的規劃與執行，各方面的老量都相當細膩，林天來說：「看到的時候很感動，我覺得慈濟做的事情，這是全球慈濟人的一種念力，我對上人的慈悲帶領非常感恩。」

臺、日慈濟志工共計一百三十位，齊心協力為第四梯次見舞金發放做足準備。帶著上人深深的期許和祝福，送來慰問的見舞金，希望能為當地帶來濃濃的愛與關懷。地震牽起慈濟人與能登鄉親的情緣，或許不能常相聚，內心誠摯祈願失去一切後的鄉親，悲傷能被治癒，幸福再度降臨，微笑迎接每一天。



■ 1 台灣慈濟志工行前於桃園靜思堂共修，會後合影。攝影／楊雅穎提供

■ 2 志工已經有經驗，分工合作，發放組、機動組同心協力進行珠洲市的場地佈置。攝影／孫素秋

愛在珠洲發放時 一杯茶水一分情

撰文／日本分會雙月刊編輯團隊（文稿提供／李月鳳・黃韻璇・楊景卉・朱秀蓮・陳思擔・蔡鳳寶・楊雅穎・朱家立・吳惠珍）



■ 穴水町鄉親吉田忍女士（左）於7月13及14日協助珠洲市發放，一天在戶外引導鄉親排隊，一天在出口處鄉親奉茶。她非常感恩慈濟帶給鄉親們的幫助和關懷。攝影／楊雅穎

珠洲市「飯田 way way 廣場」，志工向等待領取見舞金的珠洲鄉親問好道早。一早的氣溫還不到三十度，但朗朗晴空下，熱氣逐漸上升。七月十三日是第四梯見舞金發放的第一天。

溫馨互動 相互感恩

志工提早抵達發放會場，鄉親來得更早，廣場前黑壓壓的人群。為使發放圓滿，全體志工列隊誠心唱頌〈祈禱〉，祈願平安吉祥降臨這塊遭遇震殤的大地，讓鄉親及早安居樂業。之後志工加緊發放前置作業，避免鄉親久候。無論是在場內或場外，都有指示牌指引，更有志工親切引導和問候，每一個環節都不疏忽。志工群中，有多位從地湧出的能登鄉親，和來協助發放的青年志工，以溫文謙和的身影，在發放會場引導鄉親就定位。

已經跟慈濟志工像一家人般，熟練準備發放工作的吉田忍

女士，以前從來沒有做過志工，對於慈濟人的柔和感到非常暖心，「受到你們的恩惠，我一定要以身體力行回報」。說到感動之處，她不禁熱淚盈眶。

從場外的引導，到進入會場內，志工有條不紊地進行著發放作業。等待區域在繁忙時，志工也會即時奉上茶水，鄉親們不僅耐心等待，也頻頻感恩慈濟志工的體貼道感恩。志工也時而以抽「靜思語」互動，拉近彼此距離。

能登的超級阿嬤

七月十四日，發放第二天的對象是正院町、蛸島、三琦村和口置村的鄉親，將近一千三百戶。這天珠洲市的氣溫是二十五度，志工們殷勤奉上飲水和運動飲料給排隊的鄉親。

有一位阿嬤一拐一拐地走向前來，志工趕緊過去陪伴在側。這位川坂阿嬤年高八十六歲，先生在十幾年前往生，沒有

了」的失落。

志工們來到開朗的山形阿嬤家，進屋後滿目瘡痍的情境令志工們好生唏噓。阿嬤介紹了屋況後，突然拿了幾個布包包給志工。她誠懇地說：「這是一點心意，請收下。」志工打開布包一看，裡面都是銅板。原來在前往山形阿嬤家的路上，她問同車志工領到的竹筒可以做什麼用？志工回答可以每天存一點愛心，去幫助更需要幫助的人。志工感動的收下銅板，跟阿嬤道謝並說

會將這一分愛心再轉給需要的人。

同行志工林天來是花蓮人，四月三日花蓮地震當時人就在花蓮，能夠感受老人家惶恐、害怕的心情。聽說他是花蓮人，阿嬤馬上問他：「你們家還好嗎？」「我們家沒事。」聽完，阿嬤馬上說：「真是太好了！」安慰完，她希望將家中珍貴的樂器送給林天來做紀念。相互地感同身受，這分關心讓林天來感動莫名、眼淚直流。這一幕，令同行的志工

小孩的她，獨自在蛸島開店，做點小生意維生。地震時，川坂阿嬤的家全被壓垮，跌坐地上的她左腳被桌子壓傷，無法行走。幸好腳傷慢慢恢復，阿嬤很感恩慈濟大老遠跑來發見舞金給他們，「還是那麼一大筆，真的不知道該如何回饋。這筆錢對我來講非常的重要，我會將錢用在生活所需上。」

身長者不少，「加油！祝福能登的超級阿嬤們！」勇敢、堅毅的能登鄉親；真誠、可愛、親切和笑容不斷的慈濟志工。這一天對彼此而言，都是忘不了的相遇。

寬慰鄉親 好好愛自己

慈濟在能登地震受災戶的賑災，親眼見到災區房屋毀損，感受許多鄉親家毀人亡的傷痛，從發放以來，志工倍加用心，希望能膚慰他們美好家園「回不去



■ 1 能登的超級阿嬤開著小貨車來領取見舞金，她面對災難時的韌性與勇敢，令志工呂瑩瑩佩服不已。攝影／吳惠珍

■ 2 山形阿嬤從她滿目瘡痍的家裡拿出一包銅板捐出，她誠懇表示，所剩無幾，僅有的一點心意，想回饋給需要的人。攝影／楊景卉

目送她開車離去，志工對鄉親面對災難時的韌性很佩服。在能登，像她一樣自立自強的獨

也感動落淚，「沒想到她們一點都不抱怨，還那麼樂觀，令人心疼又感動。」

善解擔憂 暖語開導

在鄉親關懷區，本來愁容滿面的鄉親中根女士，在志工奉上茶水跟點心後，娓娓道出心事。幾年前她的女婿跟先生相繼往生，本來不住在一起的女兒，

也因為地震房子損毀，回來跟她同居。然而，就算是親子，有時也會有摩擦，彼此大小聲而不開心。

同樣身為人母的志工以親身經驗分享，鼓勵她既然有緣跟慈濟認識，可以從竹筒開始，每天存善念跟福田，滿了再拿去幫助需要的人，不用侷限於小愛，可能無形中母女關係會慢慢變好。中根女士邊聽邊流淚，感恩



■ 珠洲市市長泉谷滿壽裕表達感謝之意。攝影 / 吉本富美

志工大老遠帶來見舞金，她回去會好好想想志工的建議。抒發後，她跟志工依依不捨地擁抱道別，「有機會再見！」

騎著腳踏車很有元氣前來的生瀨女士，其實已經八十八歲了。她有個兒子住在金澤，地震後她選擇獨自住在組合屋。拿到見舞金後，生瀨谷女士眼眶泛淚，一直跟志工們感謝，還說要跟證嚴上人及所有的慈濟人說感謝，請志工務必轉達，「今天是我這一生永遠不會忘記的日子！」她一直不斷地重複這句話。志工祝福她面對困境，相信一定有更好的轉變，她說：「對，能登方言說，『不會痛的，不算苦，要感恩』。說完，可愛又堅強的老人家，又很元氣地騎著腳踏車離去。」

圓緣 市長感恩慈濟

七月十五日珠洲市第四梯次見舞金發放的最後一天。下午，珠洲市市長泉谷滿壽裕也

來到發放現場表達感謝之意，並關懷發放的活動是否順利。市長感恩慈濟志工特地從臺灣來支援珠洲市，並說自己去過臺灣三次，希望今後臺灣與日本的藝術家能夠持續交流。

一位值勤了一整天便衣警察表示，慈濟帶來的現金對鄉親幫助很大，「相信慈濟人的關愛，會帶給這片土地和住民更多的力量」。珠洲市見舞金發放三天共二千多戶，珠洲市市役所課長德田充則也代表市役所員工表達至誠的感恩。

圓緣時特別挑選含意殊勝的慈濟歌曲〈美〉，這首歌曲敘述慈濟之美，美在「付出再付出」、美在「心連心、手牽手」。最後，慈濟人以日文版〈愛與關懷〉和能登鄉親們一起合唱，並透過手語表達出歌詞內容。大家手牽手，在最虔敬感動中串起長情。直到慈濟人搭上巴士離開，鄉親們仍依依不捨揮手送別，都彼此心中深信「只要在慈濟，還會再相見！」



■ 志工們如燦爛的笑臉與親切的態度，如春風般暖了鄉親們的心。攝影 / 施金魚

4 能登賑災 ◆ 見舞金發放第四梯次

見舞金傳遞愛 真情關懷伴重建

撰文 / 日本分會雙月刊編輯團隊（文稿提供 / 王孟專・陳靜慧・陳思擔・楊景卉・吳秀玲・陳雅琴・孫素秋・潘耕美・羅文伶・施燕芬・施金魚）

慈濟基金會在七月十三日至十五日進行了第四梯次見舞金發放，在志賀町的富來社區活性化中心和志賀町文化館設置發放場地，每個場地的發放時間為一天半。在這三天的活動中，志工們的熱忱和細心關懷深深打動了鄉親，許多人感動落淚感受到人情的溫暖。

活動首日清晨七點多，來自東京、大阪和臺灣的六十多位志工早早便抵達富來社區活性化中心準備。之後鄉親們陸續抵達座位區，志工們熱情迎接，讓每位鄉親感受到溫暖。早上八點多，川岸育子奶奶便早早排隊。領取見舞金後，她一路流淚走向休息區，激動地說：「うれしい（很高興）」！她表示，慈濟的見舞金讓她感到無比開心，讓她深感自己並不孤單。她說：「看到這麼多鄉親領到見舞金，我真的很感動，這讓我充滿力量。」

見舞金不僅是經濟幫助，對災民而言更是一種心靈支持。七十五歲的谷口隆夫拿到見舞金

後表示，他是虔誠佛教徒，打算將見舞金放置佛龕供奉，時時提醒自己珍惜這份鼓舞。他感慨地說，地震在自己生日當天發生，給他帶來了身心的考驗，讓他更加體會世事無常。他心懷三個願望：感恩、笑著面對未來、並為社會奉獻。他珍重地收藏了志工贈送的平安吊飾，並寫信感謝慈濟的幫助。他說：「感謝、感謝，我會珍重使用這筆見舞金，真的非常感激！」谷口隆夫的真誠回應讓志工們深受感動，並邀請他一起行善，為社會帶來更多的正能量。

七月十四日，住在門前町的高島仙龍先生帶著七十六歲的太太來到見舞金發放現場。回憶地震當時，他仍心有餘悸，描述帶著家人逃至屋外，眼看屋內家具四處飛散，驚恐萬分。太太在回家整理屋子時摔傷大腿骨，不得不住院一個半月，這無常的打擊讓高島先生感到無力。志工安慰他：「無常是每個人都會經歷的，志工們帶著全球志工的祝福



■ 鄉親中野志津子女士，了解竹筒歲月精神後，抱著三個餅乾盒再度回來，想要一起行善濟助貧困。攝影／陳靜慧

來到您身邊，願您平安無事！」高島先生深受感動，激動地握住志工的手。

慈濟基金會執行長顏博文與志工團隊也前往松田外茂三阿公的組合屋探訪。阿公開心地迎接志工，表示「實在太感謝了」。地震前，阿公與阿嬤住在山上一百五十年歷史的老屋，這屋子滿載兩人記憶。他展示安然無恙的佛龕，感激佛菩薩保佑讓他們平安。顏執行長看到佛龕上刻著「無量壽」，向阿公解釋說：「這是阿彌陀佛的別號，象徵長壽與平安的祝福。」這話讓阿公備受安慰。

為期三天的見舞金發放活動中，志工們溫馨的互動，讓鄉親們在災後重建的路上得到陪伴與溫暖，見證大愛不受限。復原之路漫漫，有志工們

真情相伴，能登鄉親不孤單。

文化館 匯聚愛的地方

二〇二四年七月十四日，志賀町文化館充滿慈濟志工的溫暖和關懷，當日為地震後的一百九十六日。文化館內白板上寫滿鄉親互相鼓勵的話語：「今天是地震發生後的一百九十六日，加油！」「春天已來到，也請到能登來！」「不要認輸！雖然我們在遠方，但心卻很近，沒問題的！」這些留言簡單卻真摯，讓災區居民彼此激勵，也溫暖著志工的心，讓大家對未來充滿希望。

活動當日，志工們早早抵達文化館準備場地，並播放《大愛全紀錄》，回顧慈濟在能登地震後的救援歷程。顏執行長親自向町役所工作人員鞠躬，雙手奉上結緣品，表達感謝。他虔誠地祝福鄉親們早日恢復正常生活，並感謝役所提供寬敞的發放場地。

在活動中，志工向鄉親們分享「竹筒歲月」的精神。中野志津子夫婦受此感動，將店裡零錢收集成盒捐給慈濟。不久後，志津子太太又帶著三個餅乾盒裝滿零錢，投入慈善大海，用愛心幫助他人。這份源源不斷的愛如泉水般潤澤災區，也顯示出日本人民的善良與無私。

八十三歲的新谷清二爺爺在鄉親關懷區與志工交流，瞭解慈濟的理念後說：「臺灣和日本自古以來就是互助夥伴，大家都是一家人。當人遇到困難時，彼此幫助，大家都能幸福。」他希望將這份歷史傳承給子孫，讓年輕人明白互助的重要性。這種無私的愛源自菩薩心，讓社會更加美好。

慈濟日本分會副執行長蘇美菁承擔財務，她毫不抱怨繁瑣的工作，表示：「日本人的堅強是我學習的。他們面對困難時，仍然展現開朗的一面。」蘇美菁鼓勵鄉親要加油，希望見舞金為災後重建帶來安慰，使志賀

町成為陽光眷戀的地方。

在活動中，八十二歲的畑中悠紀子阿嬤引人注目。她住在能登地區四百年的古宅中，這裡面山臨海，自然純樸。阿嬤育有三子，其中一子於二十三歲時去世，令她每天淚流滿面難以度日。這次地震，她的古宅被判為「半壞」，屋內牆壁倒塌、地板下陷，佛龕前的觀音像仍然佇立守護著家。阿嬤表示，她會肩負起守護家宅的責任，即使寂寞，也不輕言放棄。

地震時，阿嬤緊抱家中「大黑柱」，這支撐古宅四百年的柱子在強震中屹立，保護了整座房屋。她展示了多年來的剪紙作品，志工為她的藝術才能深感驚嘆。阿嬤以剪紙表達心靈的堅韌，並與人分享愛與美。

來自橫濱的菊池阿媽一領到見舞金就忍不住大哭說：「誰會對我這麼好！」志工們笑著祝福她健康，阿媽帶著眼淚微笑，滿心感激。地震後，富來社區活性化中心成為避難所，最多時收



■ 1 菊池阿媽在富來社區活性化中心的避難所，等待組合屋完工。連續2天前來會場與志工建立感情，志工也前往避難所探視。攝影／施金魚

■ 2 畑中悠紀子阿嬤，帶著志工到她被判為「半壞」的四百年的古宅，屋內牆壁倒塌、地板下陷，但阿嬤不以為意，馬上拿出剪紙與志工分享她的創作。攝影／陳靜慧

容一百多人，目前只剩十四位居民，菊池阿媽便是其中之一。她年老且獨居，家中因地震毀損，無法再住。志工陪伴她回到這處破損的老屋，這是她地震後第三次回家，滿目瘡痍中她緩緩巡視，每處角落都充滿回憶：「這裡是我睡覺的地方」。她眼中溫柔，彷彿撫慰著這些風雨同舟的物件和牆壁。

十四日下午，志工在志賀

町文化館展開見舞金的發放，十五日清晨，團隊再次來到文化館，準備進行在能登的最後一天發放。這兩日的活動全程由町役所的總務課課長山下光雄負責，身為發放場地的管理者，山下課長始終充滿熱情的忙碌著，無論是搬運物資還是協調場地布置都非常投入。他感慨地說：「慈濟的夥伴們從臺灣、東京、大阪前來協助發放，我當然要全

力支持！」活動結束後，志工們和在場的鄉親道別，大家相約在未來的日子裡相互扶持，共同克服生活中的困難。這次能登地震讓臺、日之間的情誼更加深厚，愛的種子在災難中被灑下，讓彼此的生命不再孤單。這股愛的力量，將成為人們勇敢前行的力量，引領他們繼續前進。

靜慧

金澤工業大學助學見舞金發放 點燃學生「心」希望

撰文／日本分會雙月刊團隊整理
(文稿提供／楊景升・吳惠珍・林淑懷)



■ 慈濟志工向 48 位學生恭敬地獻上「助學見舞金」。攝影／孫素秋

七月十七日日本、臺灣、及能登當地共一十六位慈濟志工，來到金澤工業大學發放助學見舞金。

這次能登地震有四十九位學生居住重災區，分別是珠洲市、輪島市、能登町、穴水町、七尾市等地。這一震，讓許多學生家裡的生活更加拮据，校方補助一半學費，慈濟再助一臂之力，讓這些學生能安心於課業上，不再擔心家裡的負擔。

慈濟基金會代表謝景貴，鼓勵學生們要樹立明確的目標，勇敢向前邁進：「家裡雖然受災，但是一點都不孤單。今天這個見舞金，代表的是全球慈濟人的愛心，所以將來大家有更多的能力的時候，我們一起去幫助其他的人。」

愛的能量 撫平受災生傷痛

有位學生說，聽到慈濟自元月起，即來到能登災區提供熱食、發放見舞金，非常的讚歎及

感動，可見人間處處有溫暖，何況是來自臺灣的慈善團體：如今提供助學金，「這給我們莫大的鼓舞，對慈濟充滿了感激。」

學生吉田提到：「臺灣佛教慈濟基金會在地震後，長期地支援我們、關懷我們，我們能登人非常感動，更想要堅強地活下去，一步步往前邁進，未來也會開始有希望。」

另一位學生測上也說：「我自己也是有打工賺錢的，但這些金額還是不足以負擔生活費，如今有了慈濟的助學見舞金，就可以減少父母親經濟上的負擔。」

這次的助學見舞金發放，不僅為地震受災學生提供了急需的經濟支持，在精神層面上也給予鼓舞和安慰。透過慈濟的持續關懷與金澤工業大學的全力支持，期許學生在經歷災難後，重新找回了學習與生活的平衡。

未來，相信在慈濟與所有善心人士的共同努力下，這些學生將在困難中成長茁壯，走向更為光明的前程。

梅子



■ 志工與穴水總和醫院院長及醫療人員合影。
攝影／慈濟日本分會提供

◆能登賑災 ◆慈濟咖啡屋 穴水町

慈濟咖啡屋 圓滿任務

慈濟咖啡屋，不只提供茶與咖啡，更吸引許多醫護、病友、災民、鄉親和救災人員前來駐足，成了許多人舒緩身心和小憩的好所在。

撰文／日本分會雙月刊團隊整理 (文稿提供／許麗香・陳文絲・朱秀蓮・施美君)

二〇二四年一月一日下午能登半島的 7.6 級驚天一震，地動山搖後引發海嘯和大火，石川縣首當其衝災情慘重。一月十二日，十四位日本慈濟志工分從東京、大阪進駐當地。隔日（一月十三日）開始，即於穴水町冥王星交流會館啟動熱食發放。十四日起，志工再分兵二路，同步在穴水病院提供熱食，每日約需準備四、五百份。二十九日，志工圓滿第一階段的熱食供應，與鄉親相約再見。

奇妙小空間 發揮大功能

二月十六日，第二階段的熱食發放再度啟動。同時開張的還有提供淨斯烏龍茶、熱可和和熱咖啡的「慈濟咖啡屋」，在穴水綜合病院為鄉親服務。

成立慈濟咖啡屋的發想，來自於志工想到，除了熱食外，是否還能有一個地方讓鄉親能夠坐下來談談心，彼此交流互動；志工還特意準備小冊子，讓來此

的鄉親留下心聲與感想。

多謝慈濟 提供心靈療癒

隨著從五月到七月的四梯次見舞金發放圓滿，慈濟咖啡屋也要功成身退，於七月二十五日畫下句點。二十六日，志工前往道別時，島中公志院長率領醫護人員集合在一樓大廳，要致上感恩之意。

鄉親脇本女士表示：「一直以來真的非常感謝、衷心感謝，雖然找不到除了感謝以外的話語。」她感動地說，從你們那裡，我收到了貴重的東西。

院方送上鮮花、感謝卡和「多謝慈濟」的小扇子，藉此表達對慈濟的感恩。島中院長說：「非常感恩慈濟在我們最辛苦最需要的時候，持續提供熱食；慈濟咖啡屋提供好喝的靜思茶以及熱可可、咖啡，更是我們最大的心靈療癒。」醫護人員和鄉親感恩的聲音，在醫院的大廳裡迴盪。

梅子

鄉親志工心手相連

撰文／日本分會雙月刊團隊整理

（文稿提供／林淑懷・吳惠珍・孫素秋・楊景丹）



■ 穴水町第二次見舞金發放，發放對象是第一梯次時未能前來領取的鄉親。攝影／吳惠珍

七月十五日結束了見舞金第四梯次在珠洲市、志賀町的發放，一小組志工特地留下，十六日這天專程前往「穴水町冥王星交流會館」展開穴水町第二次見舞金發放，對象是第一梯次時未能領取的鄉親。

大約四、五坪的會館空間，布置簡單溫馨。志工、鄉親彼此以輕鬆自在的方式，坐於榻榻米上交流。希望，今天的幸福，可以持續陪伴孤寂的鄉親們。

阿嬤感恩 見舞金來的是時候

米田阿嬤由女兒陪同前來領取見舞金，第一次沒來，是因為沒有收到通知。這次就是在來報裡看到傳單，通知第一次發放的訊息，因此陪媽媽來。從志工手中接過見舞金，阿嬤非常感動：「這筆錢來得太是時候了，非常感謝你們！」阿嬤說著說著流下淚水。志工送上平安吊飾，並安慰阿嬤，「希望下次再來時，能一起來喝茶」。

結束不是終止 是另一個啟程

一對年過八十歲的老夫婦來領見舞金，卻沒有帶「受災證明書」，町役所職員告訴老人家，要到町役所申請，拿到受災證明書再來。經過查詢、町役所職員說，老人家的房子損壞情況，還不符合領取慈濟的見舞金條件，才沒有收到受災證明。志工中村省吾陪伴阿公一起前往查閱資料後，得知可申請石川縣與穴水町

受災居民十五萬日幣的義援金。辦妥一切手續，兩夫婦安心的嘆了一口氣，阿公哽咽地說：「我真的很緊張，又重聽、手腳不靈活、記憶力差，今日感谢你陪我們來辦理申請手續，不然我不知道該如何是好？」阿公邊擦眼淚邊道感恩。

結束見舞金發放，大愛台記者楊景丹等人隨著志工小野雅子去探望早先約好要「再見」，已九十歲的若林阿嬤，還元氣充沛的她帶著大家回到她居住的組合屋。阿嬤說她跟女兒都很喜歡臺灣，「今天家裡來了四位臺灣人，我一定要跟女兒說」，大家陪著阿嬤拍了好多張照片。阿嬤說：「我真的好幸福，現在就是我這一生最幸福的時刻。」

慈濟見舞金發放已告一段落，但志工的心意和行動卻未停歇。始終懷著「無緣大慈、同體大悲」的精神，繼續守護並關懷受災鄉親，無論是在地震恢復的道路上，還是在心靈的重建的路上。

能登賑災 ◆ 見舞金發放第二次

能登町二次發放 町長致贈感謝

撰文／日本分會整理（文稿提供／許麗香・陳文絲・朱秀蓮・施美君）



因緣殊勝 共結來緣

七月十四日第四梯次發放時，團隊特地撥出人力，前往能登町役場一次發放。七名志工加町役場職員，互相協力下迅速完成場布後提前開始作業。「復興再生」的大布幕，高掛在大廳上方。

遞上見舞金時，常有鄉親疑惑的問：「這是真的嗎？」「這是來自全球的愛心，請您把它好好收好。」地震牽起臺灣和能登的因緣，期盼緣起不滅，有更多人行善造福。

七月二十六日中午，志工前往拜會能登町長大森凡世。隊伍中還有一位本地鄉親修田勝好先生，他感動慈濟前來援助和關懷，除了拿出儲蓄的零錢要幫助「0403花蓮地震」的受災民衆，還出力成為志工，幫忙發放的引導。

一行人走上町長辦公樓層，所有辦公人員都站起來跟大家答禮！受寵若驚之餘，也為能夠幫到能登鄉親感到欣慰。大森町長表達對慈濟的感恩，他表示：見舞金給了老人家實質的幫助，慈濟人溫暖的笑容跟真誠的關懷，讓大家很難忘懷，希望能登町與

慈濟的交流能夠持續到永遠。

「感恩能登町給予慈濟人機會，讓我們感受到能登人的善良親切，讓我們有機會跟許多的鄉親結下很深的緣。我們也期待以後還有機會，來跟大家喝茶、聊聊天，到時也請町長協助我們。」許麗香執行長代表證嚴上人，和全球慈濟人，感恩能與能登結下好因好緣。

頒贈儀式簡單誠懇，大森町長說出感謝狀的內容上的文字，由許麗香代表接受，雙方恭敬行禮。禮成後全體歡喜合影，留下值得紀念的一刻。

雖然相識就是這一、二百天的時間，但純樸的能登鄉親已經將慈濟人當作是老朋友，一向予人拘謹保守印象的日本鄉親，用他們的真心和熱情，向志工表達感恩。能登優美的山海跟花蓮很像，臺灣最美的風景是人，在志工心目中的，能登最美的風景也是這群堅毅有韌性的能登鄉親。期待再次溫馨相會，就在不遠的秋天，在歲歲年年。

■ 能登町長大森凡世（左2）頒贈感謝狀給慈濟。攝影／林真子

■ 志工陳奇璋（左），看到前來領取見舞金的鄉親們感動落淚，他也紅了眼眶，期許鄉親都能保重，好好地生活。攝影／朱家立

1 能登賑災 ◆見舞金發放第五梯次 七尾市

愛在能登七尾 五個梯次見舞金圓滿

撰文／日本分會雙月刊團隊整理

（文稿提供／楊采蓉・張美齡・吳惠珍・
潘翠微・小林由意・楊景卉・施燕芬）



八月三十日起為期三天的第五梯次見舞金發放，動員八十二位志工，有來自日本、臺灣的志工，不分國籍不分老少，齊心協力把這份愛與祝福，親自送到受災鄉親的手中。

A組志工在七尾陽光生活廣場的「矢田鄉地區交流中心」發放。B組志工，隔日三十一日起前往中能登町、輪島市、珠洲市及志賀町進行一次發放。

見舞金 是很大的幫助

三十日，清晨六點前，陽光生活廣場上已有鄉親抵達。第一位來到現場的鄉親伊豆阿嬤，因罹癌導致體力不佳，靠著隨身的小推車扶持行走。七十五歲的她，領到見舞金很感動，因為她需常到醫院就診，她說，「不只是一點點，而是很大的幫助。」

一位島田女士，聽說臺灣要來發見舞金，她感到很驚訝，「真的嗎？」還打電話到市役所確認。對宗教不太了解的她，唱〈祈禱〉不由自主地流下淚來。還說「回家後要把見舞金的三摺式信封表框起來。」

水谷女士得知臺灣的慈濟要發放見舞金時，起初以為是詐騙，覺得不可思議。當她看到證

嚴上人的慰問信時，更是感動不已。聽到志工介紹一九六六年慈濟由三十位家庭主婦，日存五毛錢的「竹筒歲月」，她立即響應，帶回竹筒讓孫子們為自己植福。

一家人 風雨中的依靠

下午兩點多，雖然太陽不再那麼強烈，但廣場等候區依然悶熱。志工即時奉茶，提供椅子給不便久站的鄉親。志工領隊謝景貴與鄉親熱情互動，他說：「不好意思這麼熱，讓大家都這麼久！」幾位志工走到前方演繹〈一家人〉手語，博得鄉親們熱烈的掌聲。

慈濟的愛與關懷，藉由每一位志工的付出，傳遞到每一位受災鄉親的心中。無論風雨多大，關懷永不間斷，是每一位鄉親心中最溫暖的依靠。

微風雨 內心依然溫暖

隔天，三十一日的清晨六

時，微風夾帶著小雨，「珊珊」颱風即將來襲，天空灰蒙蒙一片。抵達發放現場時，排隊的人潮已經延伸到廣場外面。志工迅速拉出避雨線，確保鄉親們不會被雨淋濕。記取前日的經驗教訓，志工調整安排了排列的動線，將編號標示在地上和椅背上，使現場更加井然有序。

第一位來領見舞金的七十二

歲大山先生，早早來到現場等待。他的屋宅因地震部分受損，目前暫住在朋友家中。還有位松井阿嬤，聽說臺灣慈濟將提供見舞金發放，心中想著「這個美麗的夢會成真嗎？」當天來到現場，終於相信一切都是真的，感動得熱淚盈眶，激動地表示：「太開心了，我內心非常溫暖。實在不敢相信，怎麼可能有人給我這麼多的現金，而且還是不認識的人。」

五十歲的山田女士替父親領取慈濟見舞金，對於慈濟在他們最無助、最需要的時候給予援助，表示感謝。志工親手遞上見

舞金時，山田女士也感動地流下了眼淚。她說，雖然伸手接受了這筆見舞金，但希望有朝一日，自己也能成為幫助他人的人。離開前，她向志工請求多領取三個平安吊飾，因為，一個要給年邁的父親、一個將放在已過世兩年的母親靈前、另一個給住在都市的哥哥，並向他們報告，臺灣慈濟發放見舞金的善舉。

辻井先生是一位墓碑雕刻匠人，聽到志工介紹慈濟「竹筒歲月」故事，他突然從袋子裡拿出裝滿錢幣的茶罐，將錢幣一一投入竹筒內。投到第三個竹筒時，之後他又想起車上存有零錢，立即跑出去取來，將每一個竹筒都裝滿，表達了他的心意：「希望這些錢幣可以幫助更需要的人。」這善行如涓涓細流，匯成汪洋大海。離開會場前，辻井先生又多帶走一個竹筒，他表示回家要將之前整理房子時，找到的一些硬幣，投入竹筒再送來捐獻。

發放最後日 畫下圓滿句點



■ 辻井先生（左2）來領見舞金後聽到志工們介紹「竹筒歲月」，馬上響應。他的家是大規模半壞即將被拆除，連續兩日從家裡找出銅板帶來會場捐出。攝影／鐘耀賢

誠願大愛無缺

撰文／日本分會雙月刊團隊整理・攝影／楊采蓉
(文稿提供／楊采蓉・朱家立・鐘耀賢・陳靜慧)

第五梯次的見舞金發放共三天，志工分二組，A組於七尾市進行首次發放，B組以熟悉發放的志工為主，少人數移動，針對四町市住安養設施長者及因到他市避難等鄉親，進行第二次補發放，希望把溫暖與祝福送到。

八月三十一日上午B組志工二十位，早前往輪島市役所。七點半市役所一開門，立即與役所人員快速完成場地布置。第一位前來排隊的鄉親吉岡先生，早上六點就從家裡出發。他從親戚處得知有補發放，說要用見舞金來修復家裡，首先要修理地板和牆壁。水洞女士家住附近，地震發生後，搭乘救援的直升機到金澤避難，住在外地因而錯過第一次的發放。

今日有五位當地鄉親前來做志工，其中，上班族的古畑訓

先生，今年五十三歲，輪島當地人，家中全壞，目前一家人仍住在組合屋，因家裡的樑柱還很堅固，未來希望見舞金用來重建家園。因為很感謝慈濟來發放，這次補發，發心前來當引導志工。下午志工移動到志賀町當來活性化中心，有五位役所職員一同投入準備與發放。慈誠池田浩一承擔發放組以及司機，他分享，「每次發放時，雖然對象都不同，但是心念總是一致，希望當地鄉親能早日走出地震房屋毀損的傷痛。」

九月一日B組志工，上午一早前往發放地點珠洲市產業中心，市役所十位人員一起協助。八十多歲的野村奶奶，地震後住在老人院。六點半從老人院搭巴士到金澤車站，再轉計程車來。她非常感恩有這筆見舞金，要用來修復地震後被震壞的丈夫墳墓。

上午同時，有六人小組上午前往中能登町「生涯學習中心」準備，市役所五位職員協助。胡摩老先生因病痛入院第一次沒領到，還有八十七歲長淑子奶奶因有親友通知才能補領。

許多鄉親因種種原因錯失了第一次的見舞金發放，志工與役所人員又再次協力合作二次發放，願大愛無缺，真誠祝福！



■ 1 吉岡先生指著破損的牆壁說：這筆見舞金，他要用來修復家園，並優先修理地板和牆壁。



■ 2 野村奶奶避難到外縣市，今日長途跋涉終於來到會場，她非常感恩這筆見舞金，將用在修復墳墓。攝影／楊采蓉



■ 前往輪島市組合屋關懷時巧遇橋本女士（右3），她見到慈濟人分外開心，得知她住的組合屋受災，志工馬上前往關懷。攝影／施美君

◆能登豪雨支援 ◆能登町

撰文／日本分會整理 (文稿提供／王譽葵・陳麗芬・陳靜慧・吳惠珍・吳秀玲・楊景卉)

日本能登豪雨賑災團 清掃割稻我們可以的

「地震的時候就覺得好嚴重，太慘了！不過，我還能去想像未來大概會發生什麼事？我能做什麼。但是，這次水災，對於未來我連思考的力氣都沒有了。」修田勝好先生不斷回頭看著窗外，看著被土石流覆蓋的農田，語中盡是蒼涼。

二〇二四年元旦才發生7.6級強震的能登半島，九月二十一日大雨滂沱，洪水來得又快又急，「輪島市宅田第二組合屋」地處低窪，淹水達一百多公分，讓住在這裡的地震災民頓失所依。這一回的水災，等同二度受災，鄉親身心早已疲憊不堪。一方有難、八方馳援，來自日本各地的志工再次匯聚，賑災復興家園，志工齊心協力負重前行。

組合屋 女力來我行的

二十七日一早，豪雨賑災團分成兩條動線，其中一組來到組合屋關懷鄉親。由於組合屋的鄉親大都領過慈濟的見舞金，風雨

故人來，見到慈濟人分外開心。本鄉先生帶著志工走進滿是泥濘的家，正在清掃的他說著滿心的無奈，原來他有跟政府申請志工，但不知何時會來？「你看這些東西都很難搬出去。」他長嘆了一口氣。

組合屋有不少獨居長者，志工們不捨鄉親獨自面對，馬上付出行動投入清掃工作。六十九歲的橋本女士因為先生生病，無法陪同清理組合屋裡被大水淹壞的物品，她說：「剛剛看到你們來，就好像奇蹟出現一樣，連續二次的天災，真的讓人感覺沒希望了，遇到你們好像看到了希望，想抱抱你們！」話剛落下，橋本女士就想上前抱抱志工，但一想到自己的身體是孱弱的，很不好意思的退了回去。此刻，志工立馬上前抱抱橋本女士，在擁抱中溫暖了彼此。

下田去 割稻整地也行

這次的洪災，帶來的災害面



■ 志工們協助修田勝好先生（右）搶割被水境泡的稻子。攝影 / 吳惠珍

積相當大，光是農田淹水就有七百公頃受損嚴重。慈濟志工原定二十八日清掃組合屋的計畫，因為豪雨造成當地社區農田不少災情，因此除了協助清掃外，決定協助當地地區修田勝好先生與他的朋友多賀章利的一處農家，協助搶收泡在泥地裡的稻米。

「地震過後，好不容易恢復正常了，結果就遇到水災，那時候的豪雨整個水淹上來超過一公尺，我們連逃都逃不了，還好沒有淹到家裡。」干場家良先生手指著的金黃色的稻田原本該是慶豐收時節，如今佈滿著泥沙、石塊與漂流木，甚至有的農田變成水路，四處滿目瘡痍。

修田勝好先生因為地震的關係認識慈濟，是志工在能登的好朋友，他開車帶著大家看能登町農田的災害時，不斷地望向窗外，志工問他：「您在想什麼呢？」他說：「我在想這些農田要怎麼辦？還能耕種嗎？」

「素人」來 勇氣陽氣大給力

沿途所見都因豪雨導致土石

流下滑、山體暴露、稻田受損，此地的農田處處都受創嚴重。這番景象，令大家不勝唏噓，也讓他不知何去何從。二十八日早上，參與農家農田整理與稻穗搶收的志工，陸續抵達能登町，其中包含分別從東京、大阪、群馬來的慈濟志工、能登的在地志工吉田忍女士，以及陳文筆醫師及太太林昀菱，還有留學生總共二十九位。

看著依約來到的志工團隊，修田先生感激之情溢於言表，他領著志工們來到一片受傷的稻田，教導大家如何割下倒塌的稻草，闢出一條路，好讓割稻機可以進入。

平常拿手術刀的陳醫生，拿起鐮刀一樣專業，他說：「在慈濟的邀約下今天來這裡當志工，因為石川縣政府的動員，這二天很多志工都進來能登協助受災的鄉親，他們集中人力清掃受災的組合屋。而慈濟這樣進一步去考量受災者的需求，做了行動上的

調整，我覺得很好。」

一開始曾拒絕志工協助的修田先生分享：「原本覺得，這樣粗重的的工作不是大家做不到，而是覺得對大家很不好意思。」割稻時看到志工們迅速又賣力的身影，覺得很感動，他笑著說道：「大家做得比我預期的還要棒，對我來說這是一股很大的力量，更有向前的勇氣。」

多賀章利先生耕作了四十年，有三公頃的土地全部受災，因為地震山崩造成土石流下滑，之後又遭豪雨侵襲，只有一人完全無能為力，他本來想放棄這些稻子。他說，你們雖然都是「素人」，但是你們的元氣、陽氣，帶給我站起來的動力。

志工謝景貴感恩大家相聚的情誼如家人般，歷久彌新，也鼓舞著每個人「雖然災難不斷，但逆境中要找出希望，大家一起向前走。」

淨地

◆能登豪雨災害支援 ◆ 輪島市

能登豪雨支援協力隊 試運作集結愛心助清

撰文 / 日本分會整理（文稿提供 / 楊景卉）
陳靜慧・孫素秋・吳秀玲



■ 大家圍圈後，一起喊「互助合作協力隊 go go go」，開始淨空清掃運出滿是泥巴的家具雜物。攝影 / 楊景卉

為了協助日本能登町豪雨災害的復興，日本慈濟志工組成「能登豪雨災害支援協力隊」，以「以工代賑」的方式幫助鄉親整理家園。

以工代賑支援協力隊

「支援協力隊在臺灣我們都說『以工代賑』，但是在日本是說協力隊。」志工細細解釋，參與者會獲得一定的生活補助。這次以日本模式的「以工代賑」，每日一萬日圓作為參與鄉親的「支援金」。

穿上志工服 力量變大

十月一日，協力隊試運作日，志工前往鮮井豐明先生的家中協助清掃，他邀約了三位親友一起加入。「互助合作協力隊 go go go！」行動前大家圍成一個圓伸出手臂，精神喊話提升士氣。志工為他們穿上志工背心，便開始淨空屋內，搬運出滿是泥

巴的家具雜物。

首先把家具搬到屋外，再將泡過水後重量倍增的榻榻米，一個個敲開來，再移到屋外。加上慈濟志工，不到十位的人力，清理滿是汙泥的空間，相當吃力。

「這就是一種相互鼓勵與陪伴的力量吧！」看著滿身大汗，筋疲力竭的大家，齊力完成任務，志工這麼說著。最後隊員再用水清洗地板，家一點一點地恢復原貌，潔亮的房間也讓鄉親重拾生活的勇氣。

「對於慈濟只有感謝、感謝，再感謝！你們的溫暖與協助，讓我有力量開始向前。」鮮井先生道出他滿滿的感恩之情，「收到的支援金，我會好好珍惜。大家都是互相幫助的心來相挺，未來在我能力的範圍內，也希望有機會付出。」

志工深信只要這分愛的能量加乘變大，鄉親重整家園就不再無依，美好未來就不再遙遙。

淨地

來自遠方的溫暖 豪雨之後攜愛到輪島

十月一日起連著三天，每天早上七點，志工們帶著自己準備的飯糰作為午餐出發，前往輪島市豪雨後的災區進行支援。市政府提供尚未開放使用的「輪島觀光旅遊諮詢中心」作為志工們的據點。

撰文／日本分會雙月刊團隊整理・攝影／楊采蓉
(文稿提供／陳靜慧・楊景升・施燕芬・孫素秋)



■ 志工前往鮎井先生家協助分類搶救物品。攝影／孫素秋

鮎井先生的住家是坐落在小山坡旁，大雨沖刷，泥土流入住家，一樓全是泥濘，房屋已不堪居住，面臨拆除。九月三十日志工得知後，前往協助分類搶救物品，並協助他將有用的物品運至親人的住處。

勘災組也前往小伊勢町，此地被認定為此次水災最嚴重的淹水區，街道上仍滿是泥濘與漂流木，當時水位淹沒整個社區。

三日，志工再度來到他的倉庫和工作坊。這裡的物品因水災幾乎無法再使用，許多半成品和機器只能捨棄。志工們看到一些看似完好的作品，便問他是否可以帶回臺灣義賣，為他籌善款。鮎井先生拒絕了，堅持要以完成品回報大家，他眼神堅毅地表示：「我是職人，我有我的自尊與驕傲。」他的堅持與堅毅，也讓志工們深深敬佩。

元旦的地震，讓鮎井先生失去一切，他說：「所以我哭了」

二日「能登豪雨災害支援協力隊」行動正式啟動，志工分組展開行動，愛的傳遞無一刻停歇。三日清晨，輪島下起大雨，氣溫驟降至十七度。

慈濟毛毯 披在身暖在心

三日上午九點，下著雨，志工來到山岸町的「山岸第二團地組合屋」拜訪外畑女士。外畑女士是慈濟的見舞金受惠者，因而結識慈濟志工。前一日她與志工再度相遇，談到自己住的組合屋受水災嚴重影響，榻榻米浸水後發霉，清理起來吃力，志工們了解情況後便展開協助。

在地志工南里美女士是護理人員，她向外畑女士解釋，浸泡過泥水的榻榻米會滋生病菌，無法再使用，建議將榻榻米丟棄。於是，屋主緊急聯繫市役所工作人員，經確認後，將榻榻米搬上小貨車，運往廢棄場。

工作告一段落，志工獻上義援金時，阿嬤滿懷感謝地說：「我們靠年金生活，這次的支援金對我們意義重大。」阿嬤說：「最大的快樂，就是能為家人準備好吃的飯菜，有了援助金，我要買些菜來改善伙食。」

持續關懷 攜手共合作

輪島市中心的河井町的重藏神社擁有一千多年的歷史，是水災的重災區之一。當地神社的神主能門亞由子女士，承擔著復建與組織志工的責任。她表示，地震後自己雖失去一切，卻體會到互助的力量就是支撐她的動力。隨著志工們的持續協助，她的心也找到了依靠。

十月三日下午，勘災小組告別能門女士，並表達希望未來能在復興工作上持續合作。期待著，愛的集結與力量，能幫助輪島的鄉親在風雨過後看到希望。

打掃結束後，志工特別準備慈濟毛毯送給四位協力隊的鄉親。其中，馬場先生接過毛毯，不斷地說：「這毛毯真溫暖、輕便，顏色也漂亮！」豪雨後土石流沖刷，橋面斷裂，所以他至今仍無法回家，摸著毛毯，他說：身上僅有這件衣物，現在有了這毛毯，真是雪中送炭。」志工承諾會為他寄送更多物資，以備過冬。

外畑女士則滿含熱淚地說：「你們的支援對我來說意義重大，真的很感謝你們。自地震以來，心裡一直很痛，現在你們來看我，給了我莫大的安慰。」對於二次受災的居民來說，一句問候、一聲祝福，都能帶來力量。

信任支持 臺日相約再見

三日的上午忙碌地幫助了兩戶居民後，志工們下午再度前往協助輪島塗職人鮎井辰也先生。

志工領隊謝景貴向大家表達感謝：「很感恩市政府的支持，圓滿了我們的以工代賑計畫。鄉親信任我們，所以我們的每一步都需充滿感恩之心。」這份互助與感恩，成為志工團隊持續向前最大的動力。



■ 志工協助宮野夫婦家清掃。攝影／楊景升



■ 慈青學長把握時間付出。這群年輕的力量與資深的志工合心協力，以誠以情，付出無所求。攝影 / 慈涓

1 志工故事 ◆ 代代相傳 以誠以情膚慰

撰文 / 日本分會雙月刊編輯團隊 (文稿提供 / 黃韻璇・楊雅穎・蔡鳳寶・林淑懷)

積善之家有餘慶，在見舞金發放現場，有不少人是與家人一起來做慈濟志工，也有慈青學長把握時間付出！這群年輕的力量與資深的志工合心協力，以誠以情，大家付出無所求的身影，帶來了善與愛交流的正能量。

親子組：江原宏益、黃韻璇、林映美里、林秋里

高中生江原宏益趁著暑假空檔和母親，從東京到能登參與見舞金發放。宏益感恩證嚴上人為大家帶來這分因緣，讓他有許多體會。「自己生於斯、長於斯，感恩能為生長在這片土地上的鄉親付出一點力量。」

他擔任見舞金領取窗口，在第一線服務好幾位高齡長輩。一位九十七歲長輩獨自來領取，交談中感受到長輩對臺灣很有情感。這次能將臺灣點滴累積的愛心帶來，和鄉親做有溫度的分享，覺得非常有意義。母親黃

年輕人：洪秀瑩、張奕澄

慈青學長洪秀瑩在美商公司上班，與日本籍先生結婚後，育有一子。她每日忙碌於工作，這次在百忙之際抽空來參加，負責人文真善美紀錄。來能登之前，兒子已經病了三天，心裡會掛念著，她很感恩先生的成全，才得以完成這次的任務。

在發放現場，她不只拍照，也協助翻譯、動線引導、關懷鄉親。在酷熱現場，她看到八十五歲的橫山豐惠阿嬤只用一條手帕遮住頭，不捨已背駝的老人家，上前牽著她到遮陽的地方坐下。事後她分享，「只是舉手之勞，阿嬤還跟我道感恩，聽得我心酸酸的。」

來自蘇州的慈青張奕澄，今年三月才來到日本準備考研究所，在慈青高峻結的邀請下參加了這次發放。看到鄉親們的哭泣，她深感悲痛，希望能為災



■ 1 林映美里(中)分享：「此次參加讓我的人生增加了很光明的色彩」，更感動志工們與鄉親互動的恭敬身影，令她差點落淚。攝影 / 劉奕男

■ 2 慈青江原宏益：自己生於斯、長於斯，感恩能為在這片土地上的鄉親付出一點力量。攝影 / 蔡鳳寶

韻璇從慈青開始接觸慈濟，這趟身兼活動組和人文真善美工作。她說：自己是慈二代，先生也很護持慈濟，感恩能與兒子一起「見苦知福」做慈濟，代代相傳，看到災民的笑容是最開心的！

林映美里也是承擔發放，「這是一種非常新鮮的體驗，我的人生增加了很光明的色彩。」她表示看到每一位志工是那麼有禮貌、輕柔，發放見舞金時，都是九十度的鞠躬，「實在是讓我非常的驚訝，而且很感動，好幾次我的眼淚都快掉下來了。」

映美里參與此次發放，最開心的莫過於媽媽志工林秋里，媽媽說：「我一直跟她講慈濟，講了好幾年，她這次肯來，我真的很高興！」或許是聽到說「都聽人家講，或是看電視，不如自己走一趟。這句話激發出她的行動力」，也因為親身參與，見證慈濟人的大愛。

民貢獻一分心力。去家訪的回程途中，一位鄉親停下機車，主動跟他們打招呼，並說：「地震發生時，我正好在屋外，看到鄰居房子倒了，人被壓在底下，我很想去救人，但是餘震來了，無法施救啊！」這事讓這位鄉親感到痛苦，一直無法釋懷。奕澄說：「當時想不出如何安慰這位鄉親！」鄉親因為苦難，需要被撫慰，「也許我們的到來及心意，會成為他們重拾生活的動力和心靈的支柱。」

媽媽志工：土方理惠、李月鳳

志工土方理惠嫁來日本三十多年了，媽媽是慈濟委員，但早期因上班跟孩子小沒法投入。日本311時，她開始積極參與而後培訓授證。家人也很護持她做慈濟，現在的「慈濟百草園共修點」就是由她的公公所提供。土方理惠總是默默付出，能登發放她四梯次全程參與。「天災人力無法抵擋，但我們可以善解。」

她說：「我是用感恩心、同理心，還有回饋這片鄉土的心來為鄉親付出。」

志工李月鳳，個性開朗活潑，因311地震積極投入慈濟，現在承擔協力組長。她說：「我是311震出來的！」嫁到日本三十多年了，期間她和先生也瀕臨婚姻破裂的邊緣，是慈濟

救了她。所以她用感恩心，發心立願要為證嚴上人承擔一分力量。

擁有照護師證照，為了能有彈性時間可以做慈濟，她選擇上大夜班，只要慈濟有活動，她會預先把假期排出來。能登發放她全程參與四個梯次，雖被列在人文真善美功能，但她看到鄉親

排隊人潮不斷，就跑到隊伍中幫忙引導。她說：「做慈濟，就是隨時補位，盡力讓事情圓滿！」

真誠是最美的畫面，無私是最感人的篇章，志工跨越國界和文化的愛心，是讓這片受傷土地重新站起的希望之光。相信全體志工的付出和熱情，將永遠銘刻在每一位鄉親們的心中。



■ 1 志工土方理惠（左）四梯次全程參與。她是用感恩心、同理心，還有回饋這片鄉土的心來為鄉親付出。攝影 / 蔡鳳寶

■ 2 志工李月鳳（右）四梯次全程參與。做慈濟，就是抱持著隨時補位，盡力讓事情圓滿！攝影 / 蔡鳳寶

2 志工故事 ◆

慈濟鄉親關懷 見證有愛不孤單

撰文 / 黃韻璇整理

（文稿提供 / 陳靜慧・施金魚・羅文伶）



■ 日籍志工藤本市子（左1），參加見舞金發放得到一股正能量，自己也受到鼓舞。攝影 / 陳靜慧

見舞金用完就會消失，但是志工傳遞給鄉親的那分關懷、善良的心意，相信會一直留著！每一次的發放，志工總是努力為每位領見舞金的鄉親，奉上一杯溫暖的臺灣茶，也邀約大家一起坐下來談談天。

傳遞愛與關懷：藤本市子

住在日本三重縣的藤本市子，去年開始參加見習志工培訓。去年底她回靜思精舍參加七天的志工服務，慈濟人的熱情和溫暖，精舍師父們的自給自足以及任勞任怨的精神，讓她欽佩。「每天的法喜，難以言喻！為什麼慈濟人這麼善良和溫暖呢？」她期許自己有一天，能真正成為慈濟人。

在發放時她投入鄉親關懷，跟九十四歲的菊池阿嬤互動時，藤本市子感到不可思議的是，阿嬤年歲這麼高，雖然住家全毀，一點也不頹喪。從她的身上感受

愛從四面八方來
盧瑩恭・黃麗伶

到一股正能量，自己也受到鼓舞。與鄉親的互動讓她更加了解，「原來我們來發放見舞金，不只是要給受災鄉親經濟上的資源，我們還要陪伴他們，給予精神慰藉，拔除他們內心的苦。」

盧瑩恭和黃麗伶夫妻，來到日本已有四十年，住在岐阜縣。第一次參與慈濟活動，清早三點半就出發，開了近四小時的車來到發放會場。盧瑩恭在茶水區服務，幾次後已能主動請鄉親停下腳步，微笑地送上結緣品和奉上一杯熱茶。由於日語流利，還協助志工翻譯。黃麗伶則在引導區服務，是中英文老師的她長期與孩子們相處，十分熱情，對引導鄉親動線的工作駕輕就熟。初次接觸慈濟人：「今天很榮幸地有機會參加這次的活動，仰慕慈濟很久了！謝謝你們給我們這個機會，能夠來幫助大

家。「我們能一起付出，感到很光榮也很開心！」二人都期待日後能再相逢。

見證愛的力量：王美玲・深惠美

一九七八年王美玲隨著先生從臺灣來到日本定居，二〇〇年受證委員。這次參與見舞金發放的她，每當她提醒：「見舞金是現金您要收好喔，把它收在袋子裡，才不會掉了。」很多人都頓時眼眶泛淚，有些人領了見舞金，欲言又止，沒有馬上離開。

有一位鄉親，領完見舞金幾個小時之後，又回到會場。他說：「回家一看這麼多現金，我不能拿這麼多！」因此他捐出四萬日幣，要幫助其他受災的鄉親。更令人感動的是，他在前一天，就已經利用匯款捐給慈濟五萬日元了。這分患難相扶持的情誼，日本鄉親感懷在心，進而激發心中的善念，要再去幫助別人。



■ 1 志工深惠美（右）向來領見舞金的鄉親上野和子介紹竹筒歲月，並邀請她來當志工。攝影 / 施金魚

■ 2 志工王美玲（中），參與見舞金發放感動滿滿。攝影 / 孫素秋



■ 1 來自岐阜縣的盧瑩恭（圖1右）與太太黃麗伶（圖2左）第一次來當志工參與發放……攝影 / 孫素秋

■ 2 志工黃麗伶（右）歡喜參與。攝影 / 施金魚

七十歲的慈濟志工深惠美二十六年前來嫁到日本，參加見舞金發放完後，晚上十點多她回到京都車站時，先生已經等候在外。那一刻，她很感恩自己可以無後顧之憂來做慈濟，先生身體也很健康。

看到鄉親們

因為無常的天災，那種無奈感傷悲痛。她感觸良多，將心比心，想到他們生活上無法如常，經濟面臨危機，木只是生活上的惶恐，內心的創傷不知何處去傾訴。雖然是短暫的接觸，彼此以誠相待！所以回家之後，她常常一位一位打電話給鄉親，希望鄉親認識她的電話號碼「不是詐欺」，「我偶而會打電話給你們喔！要記得我的號碼喔！」愛的問候，傳達溫暖。

鄉親服務鄉親：

高田良雄・高田琳子・上野和子

「早安！」引導組志工高田良雄彎著腰熱情地問候鄉親，並且伸出手向著前方指引鄉親到會場入口處。太太高田琳子則在入口檢視鄉親的發放通知書及罹災證明，夫婦倆就住在附近。她說：「很開心看到慈濟人來幫忙！這裡的鄉親就像是我的家人，慈濟人都來了，我們怎能不來！」地震發生後高田夫婦，在

了，還好我有來！」

原本對臺灣一無所知，但是經過這次後，透過志工感受到無比地親切和溫暖；結束後兒子來接上野女士回家，志工讚歎兒子「您好孝順喔！也讓您媽媽當了一天的快樂志工。」兒子立即回應：「這是應該的，感恩你們！」

年輕人的賑災感悟：

高峻喆・王羿晴

「這幾個月來，是我人生當中最難忘的一段回憶！」高峻喆家住中國蘇州，接觸慈濟的因緣來得早。十三歲時就開始在書軒當起小志工。二〇二〇年，從大陸來到日本留學。當時他想到慈濟，搜尋到日本分會的地址，毅然前往。找到了日本慈濟的家，他常利用課餘時間參加活動，也在人文教室陪伴小朋友。

能登賑災第一階段的熱食

家裡為鄉親煮熱食，二月份接觸到慈濟人之後，開始參與慈濟在穴水町的熱食發放。

七十六歲的本地鄉親上野和子，拿完見舞金後，受到志工深惠美邀約，隔一天打電話說要

來做志工。因為平日出門需要有人接送，回家跟兒子商量後，兒子答應開車載她過來做志工。還鼓勵她：「對！受了這麼大的恩惠，應該要回饋。」上野女士非常熱心的，站在會場門口親切提醒：「有臺灣御守吊飾，還有點

心喔！請往這邊！」

如果有鄉親錯過了，會馬上追上去提醒，希望沒有人漏掉這來自臺灣的禮物與祝福。帶著病痛與地震後的傷痛，上野女士反覆說了多次：「我鼓起勇氣來



■ 5 第一次參加發放活動的志工陳詩萍（右）把握因緣勤耕福田。攝影 / 孫素秋

■ 6 當地志工高田琳子（右）協助檢視通知書及罹災證明書。攝影 / 孫素秋

■ 7 慈青高峻喆（中）來自中國蘇州，2月份時就參加過能登熱食發放，再次參加見舞金發放，看到災區與鄉親的苦，慶幸能參與見舞金發放，幫助別人是最有福。攝影 / 施金魚

供應時，遇到下大雪，天寒地凍，很多志工雖沒有煮大鍋飯的經驗，但是大家同心協力洗菜、切菜、煮飯，使命必達的精神，看了無比感動：「我覺得師姑們就是那份菩薩心，大家就像一家人一樣，覺得很溫暖。」之後他也抓住機會，參與了見舞金的發放。

見舞金發放時，羿晴看到每位前來領取見舞金的鄉親，感覺跟家中的阿公阿媽一樣親切。看到受災戶，他深感不捨，所幸有慈濟人來關懷，也很開心可以為他們盡一分心力。

內中

鄉親關懷，不分年齡，因為付出而滿足，因為見苦而知福。能登賑災行，貼近鄉親，傾聽心音，感受無常，而更懂得珍惜如常。感受生命中的悲與苦，也見證人間有愛不孤單！

能登賑災第五梯次的見舞金發放。在困難中堅持，志工們以大愛的身行感動當地的鄉親們，進而加入慈濟的行列，一同為受災的鄉親們帶來溫暖和希望。

來自大阪的日籍志工七十七歲的中村省吾在現場指引鄉親入座。有一天一早就湧入二千多人，鄉親開始鼓譟，中村先生立即走近向大家鞠躬道歉，並說：「請大家守規矩，拜託大家了！」因為心中有證嚴上人的法，能同理心處理突發狀況。

他與太太余瓊珠，五梯次的發放從未缺席。瓊珠常常膝著地，跪著關懷鄉親，因為感恩鄉親們願意接受幫助。從中體悟「人傷我痛，人苦我悲」的精神。因為慈濟有溫度而且持續的關懷，感動了不少鄉親也來做手向下的人。



■ 五梯次見舞金發放都全程參加的志工中村省吾（右），於各梯次承擔不同的功能，唯心中有愛，才能處理突發狀況。攝影 / 慈涓

◆志工故事◆展現「竹筒歲月」精神 佈善種子散播愛

撰文 / 日本分會雙月刊編輯團隊

（文稿提供 / 楊采蓉·張美齡·吳惠珍·潘翠微·小林由意·楊景卉·張美齡·施燕芬）

山岸久美子原本是護理師，因為職業傷害辭了工作。領完見舞金後，志工發現她邊走邊掉眼淚，連忙請她坐下來，奉上茶及點心。兩年前先生過世後，她自己一人獨居，感到很無助。志工邀約她走出家門，一起來做快樂志工。當下她猶豫不決沒答應，隔一天真的勇敢的來到現場！她說：「很久沒有跟人聊心事，是你們的開朗給我鼓勵！用自己微小力量付出。愛別人，也要愛自己！」

把握善因緣：小林由意・大橋美紀枝・梅津和子・竹下美穗

生長在臺灣的小林由意，中文系畢業後到日本學語文，因此嫁到日本。得知慈濟正在為能登地震災民供應熱食，她決定前往了解，因而有因緣參加慈濟。在活動中，她被許多白髮蒼蒼，無私奉獻的志工們所感動，精通中日語翻譯的小林由意，之後又參加一個梯次的發放，被分配到

關懷組、人文真善美，也協助大愛臺進行採訪翻譯。

七尾醫院的陳文筆醫師邀請了二十餘位當地鄉親來擔任志工。有位已八十多歲的梅津和子女士，在當地溫泉旅館工作了近五十年，因地震失去了工作。看到慈濟志工穿著一致的制服，女眾梳著整齊的頭髮並戴上頭花，她對這個整齊的團體，以及志工們的親切，產生了良好的印象。

梅津女士非常感激慈濟在災區的發放，尤其遠從臺灣來的志工，更是令她深受感動。穿上志工背心的她表示，覺得有機會能付出一點力量，感到非常幸福。

有位大橋美紀枝女士是熱心公益的家庭主婦，早在二十多年前就察覺到氣候變遷的危機，並開始積極參與資源回收和海灘清掃活動。甚至在社區推動回收物資再利用，創作手工藝品。她

的理念跟慈濟非常契合：「期許自己就像一粒善種子，散播在走過的足跡，讓被污染的大地化為清淨之土。」

另一位竹下美穗女士表示，沒想過會遇上如此大的地震，這次的經歷讓她體會到無常就在身邊。雖然自己也成了災民，喜歡臺灣的她決定也來當慈濟志工，貢獻自己的一分心力。從事會計的她對慈濟發放現金感到難以置信。參加之後深深被志工們的親



■ 1 竹下美穗女士（右），體會無常把握當下前來當志工，奉獻己力。攝影／張美齡
■ 2 梅津和子女士，感動從台灣前來災區付出的慈濟志工，能一起付出力量令她備感幸福。攝影／潘翠微



■ 3 受災鄉親佐藤文惠（左），住家半壞，雖不滿 65 歲無法領取見舞金，但依然穿起慈濟背心一起慰當當地鄉親。攝影／張美齡
■ 4 珠洲鄉親瓶子睦子女士，領完見舞金後，再次投入當志工回饋慈濟。攝影／張美齡

自能登町，先前參與能登町、輪島市的發放，這是第二次當志工。她的家雖然也在地震中損壞，但未符合發放資格，富田女士表示，「慈濟志工都自費自假來到這裡幫忙了，我身為日本人，當然要出來做志工。」

瓶子睦子女士，住家全壞，在第一次珠洲發放時，領到見舞金後，隨即投入志工，這天二次發放，她再次前來付出。與兒子共同經營美容院的她說，要將領到的見舞金交給兒子，作為重新開張美容院的資金。九月一日她八點便抵達會場，立即穿上志工背心投入引導行列。

感恩許許多多看似微小的善舉，卻是如同一粒粒善的種子，正在這片受創的土地上生根發芽，逐漸成為社區重建的堅實力量。發放不僅僅是幫助鄉親，更是種下了大愛的善種，期待它發芽成大樹，遮蔭更多人。

切和朝氣所感動，看到大家的努力覺得自己也受到鼓舞。

竹筒精神善與愛：佐藤文惠・高岡園子・富田明子・瓶子睦子

鄉親佐藤文惠，身穿慈濟志工背心，笑容滿面地向鄉親講述慈濟的故事。原來她生長於臺灣花蓮，姪女現在是花蓮慈濟醫

院的護理長，因此對慈濟十分熟悉。三十七年前她嫁到日本，目前在七尾市經營餐廳。她選擇將店休息一天來擔任志工，邀請大家多來了解慈濟，並鼓勵一起參與愛心行動。

高岡園子女士是七尾市婦女會的成員，也是受災戶。她參與兩天的志工，不僅引導鄉親領

取見舞金，還在關懷區積極拿著竹筒向鄉親介紹：「這不是一塊錢哦！而是五毛錢，但它能成就好事，相信嗎？」每個人小小的力量可以成就大善行。因為感動，所以想要讓更多人知道慈濟人的善舉。

珠洲市的一次發放時，富田明子再度穿上志工背心，她來



■ 濱木満喜さん(右一)は、ボランティアを連れて建物が倒壊した被災地の正院町を案内しました。写真/顔福江

1 能登災害支援 ◆ 第四回見舞金の配布 珠洲市

台湾チーム出発前の訓練 重災地に哀悼の祈り

訳/朱家成・文/日本分會雙月刊團隊整理

(文章提供/朱秀蓮・周利貞・孫素秋・楊雅穎・蔡鳳寶・施金魚)

慈濟日本分會は「日本能登地震見舞金第四回配布」は、七月十三日から十五日にかけて実施され、台湾からの支援団二十一名が七月十一日昼に桃園靜思堂に集まり、集中的な研修を受けました。この研修では、災害支援活動の詳細な理解に加え、チームの意識統一、行動の礼儀作法の確立、そして慈濟の文化的な価値観の表現が重視されました。

意識の統一と
人文的価値観の表現

今回の活動のリーダーを務めた桃園区のベテランボランティア、林仲篋さんは、チームメンバーに「この特別な縁を大切に、多くの人々に目を向け、耳を傾け、思いやりの心を持って行動し、見聞きしたことを記録してください」と伝えました。「団体行動は慈濟を代表するも

のです。礼儀正しく、真心を込めて、人文的な美しさを表現しましょう」と林さんは強調しました。

宗教部海外事務室の副主任である林裴菲さんは、元旦地震から半年以上が経過した現在も、被災地の復興が遅れている状況を指摘し、慈濟の大愛チャネルのニユースを通じて、温かい食事の提供から見舞金の配布に至るまでの慈濟の支援活動を紹介しました。

三日間で五千世帯以上への支援を実施

宗教部の周利貞さんは、第四回見舞金配布の会場となる珠洲市と志賀町について、配布場所、手順、交通ルート、宿泊に関する規則など、詳細な説明を行いました。支援団は穴水町に宿泊し、一つのグループは震源

地である北部の珠洲市の飯田わくわく広場で、もう一つのグループは南部の志賀町の富来活性化センターと志賀町文化館で配布活動を行いました。三日間の配布で、支援対象世帯は五千を超える見込みとなりました。

配布前の珠洲市視察

能登半島最北端に位置する珠洲市は、今回の大地震で最も深刻な被害を受けた地域です。特に宝立町と正院町の被災状況は甚大で、七月十二日にボランティアたちは被災地を視察し、地域住民のために何ができるかを考えました。

ボランティアを乗せたバスが珠洲市正院町公民館に到着すると、館長の小町康夫さんが自ら出迎え、「今日で避難所としての役割が終わります。一月一日から七月十二日まで、百九十

四日間続きました」と説明しました。

平穏な生活への願い

七十六歳の濱木満喜さんは、正院町の被災地を案内しながら「この地域には高齢者が多く、毎日三食の温かい食事が食べら



■ 台湾からのボランティアは持ち込んだ支援物資を整理する。写真/楊雅穎

れるだけで満足しています」と語りました。シンプルな願いであり、日常の生活を取り戻すことができれば十分なのです。

正院町の倒壊した家屋を目の当たりにし、心が重くなる中、林仲鏡リーダーはボランティアとともに犠牲者のために黙祷を捧げました。亡くなった方々の御霊の安らかな眠りと、生存者の平安な生活を祈りました。

被災者に共感し
地域住民を励ます

次に訪れた宝立町は、地震に伴う火災と津波で家屋が深刻に損傷しており、現地の人々の苦しみが深刻です。破損した家屋は公的に解体申請が可能ですが、作業員が不足しており、住み続けられる家も限られており、復旧作業が非常に遅れています。多くの高齢者は、子供た

ちに迷惑をかけたくないため、仮設住宅に住んでいます。

「皆さん、地域の人々の心情を共感し、理解してください」と、ボランティアの謝景貴さんは、皆に語りかけました。災害で壊滅的な状況を見て、初めて慈済の国際支援活動に参加した林天来顧問は、涙をこぼしました。慈済がどれほど細かく配慮し、計画的に支援を行っているかを実感し、「見ていて感動しました。慈済の活動は、世界中、慈済の人々の念力の表れです。上人の慈悲深い導きに感謝しています」と話しました。

台湾と日本の慈済ボランティアは、合わせて百三十人が協力し、第四回の見舞金配布に向けて準備を進めました。上人の深い期待と祝福を持ち、地域の皆さんに慰めの見舞金を届け、能登の人々に愛と関心を伝

えました。地震は、慈済と能登の人々との絆を深め、たとえ頻繁に会うことができなくても、心から祈りを捧げ、悲しい気持ち

ちを乗り越え、再び幸せが訪れるようお願いし、毎日、笑顔で迎えられると願っています。



■ ボランティアたちは、こころをこめて黙禱をしています。写真 / 楊雅穎



■ 飯田わくわく広場の前に人だかりができていました、心を込めて「祈り」の歌を歌い、平安と幸せが訪れますように。写真 / 慈涓

2 能登災害支援 ◆ 第四回見舞金の配布 珠洲市

珠洲での支援金配布の時 一杯のお茶に込められた思い

訳 / 岩村益典・文 / 日本分會雙月刊團隊整理

(文章提供 / 李月鳳・黃韻璇・楊景卉・朱秀蓮・吳惠珍・陳思擔・蔡鳳寶・楊雅穎・朱家立)

珠洲市の「飯田わくわく広場」では、見舞金を受け取りに来た珠洲の住民にボランティアが挨拶をしていました。朝の気温はまだ三十度に達していませんでしたが、晴れ渡る空の下、暑さが徐々に増していきまし

した。会場の内外には案内板が設置され、さらにボランティアが親切に案内や声かけをし、一つ一つの動作に気を配りました。ボランティアの中には、地元能登から駆けつけた方々も多く、彼らは支援に来た若いボランティアとともに、柔和で謙虚な姿勢で配布会場で住民の方々を案内しました。

心温まる交流 互いの感謝

ボランティア達は配布会場に早めに到着しましたが、住民の方々はさらに早く来ており、広場の前には黒山の人だかりができていました。配布が円滑に行われるよう、ボランティア全員が列を作り、心を込めて「祈り」の歌を歌い、この震災の悲しみに見舞われた土地に平安と幸せが訪れ、住民の方々が早く安心して暮らせるようにと願いました。その後、ボランティアは住民の方々を長く待たせないよう、配布の準備作業を急ぎま

慈済のボランティア達と家族のように親しくなり、配布作業の準備に慣れた吉田忍さんは、以前はボランティア経験がなかったそうですが、慈済の人々の温かさに心打たれ、「皆さんの恩恵を受けて、体を動かして恩返しをしたい」と感動で熱い涙を流しました。しかし、サービスマンに影響を与えたくないという気持ちで切り替え、笑顔で慈済の人々に挨拶をしました。

会場外での案内から会場内に入るまで、ボランティアは整

然と配布作業を進めていました。待機エリアが混雑する時には、ボランティアがお茶を提供し、住民の方々は辛抱強く待つだけでなく、慈済ボランティアの思いやりに頻繁に感謝の言葉を述べていました。時にはボランティアが「静思語」の言葉を引用して交流し、お互いの距離を縮めました。

能登のスーパーおばあちゃん

配布二日目の七月十四日、配布対象は正院町、蛸島、三崎村、日置村の住民で、約千三百世帯でした。この日の珠洲市の気温は二十五度で、少し暑く、ボランティアは列に並ぶ住民の方々に飲み物やスポーツドリンクを熱心に提供しました。

ボランティアは、一人のおばあさんがよたよたと歩いてくるのを見て、すぐに寄り添いました。この川坂おばあさんは八十六歳で、夫は十数年前に他界し、子供もいない彼女は、蛸島で一人で店を開き、小さな商売で生計を立てていました。

地震の時、川坂おば

あさんの家は完全に押しつぶされ、床に座り込んだ彼女の左足はテーブルに押しつぶさ



■ 1 台湾からきたボランティアの林天来は、来場者の皆さんに心を込めて、お茶を配りました。写真/呉恵珍

■ 2 恩返しをしたいと川坂おばあさんは、硬貨数枚を取り出して、ボランティアに渡している。写真/呉恵珍

ボランティアは、歩行が不安定な彼女に付き添って駐車場まで行きました。運転席に座ると、おばあさんは「皆さんはこんなに優しく、こんなに思いやりがあって、本当に感謝します」と言いました。この時、ボランティアがポケットからパイナップルケーキを数個取り出して彼女に渡すと、彼女も恩返しをしたいと車内を探し回り、五百円硬貨を数枚取り出して「これで何か食べ物を買ってください」と言いました。ボランティアは彼女が気づかないうちに

れて歩けなくなりました。幸い足の怪我は徐々に回復し、おばあさんは慈済が遠くからやってきて見舞金を配布してくれた事に感謝し、「こんなに大金を、本当にどう恩返しすればいいのかわかりません。この金額は私にとってとても重要で、生活に必要なものに使わせていただきます」と述べました。



■ 3 山岸さんは地震以来ずっと我慢して泣く事が出来ず、見舞金を受け取りに来た後、皆さんの優しさに涙が止まらないくらい泣きました。やっと笑顔を取り戻した後、ボランティアも一緒にやると慈済ボランティアに約束しました。写真/蔡鳳寶

■ 4 ボランティアで駆けつけた地元の人々が善意の募金を行い、通りかかった人々もそれに続き、善意の輪が広がった。写真/呉恵珍

そっとポケットに戻し、静かに「あなたの感謝の気持ちは受け取りました」と言いました。おばあさんは生活が厳しいにもかかわらず恩返しを忘れず、ボランティアの心は言葉にできないほど感動しました。

彼女が車で去っていくのを見送りながら、ボランティアは災害に直面した住民の方々の強さに感銘を受けました。能登には、彼女のように自立し、強い独身の高齢者が少なくありません。「頑張れ！能登のスーパーおばあちゃんたち！」勇敢で強い能登の住民の方々、そして誠実で愛らしく、親切で笑顔の絶えない慈済のボランティア。この日は互いにとって忘れられない出会いとなりました。

住民を慰め 自分を大切に

慈済は能登地震の被災者支援において、被災地の家屋の損

壊を目の当たりにし、多くの住民が家を失い、家族を亡くした痛みを感じ取り、配布開始以来、ボランティアは倍以上の心を込めて、彼らの「もう戻れない」美しい故郷への喪失感を慰めようと努めました。

ボランティアが明るい山形おばあさんの家を訪れると、家に入った途端、目に映る荒廃した光景に深くため息をつきました。おばあさんが家の状況を説明した後、突然数個の布包みをボランティアに渡しました。彼女は誠実に「これは少しばかりの気持ちです。受け取ってください」と言いました。

ボランティアが布包みを開けてみると、中には硬貨が入っていました。実は山形おばあさんの家に向かう途中、彼女は同乗していたボランティアに、もらった竹筒は何に使えるのかと尋ねました。ボランティアは毎



■ 1 ボランティアの布施恵（右）は、地元の方に慈済日本志業を紹介しています。
写真 / 呉恵珍

■ 2 生瀬さんが「今日は、私の人生で永遠に忘れられない日です！ 皆さんありがとう」と感謝の意を述べた。写真 / 黄韻璇

日少しずつ愛を貯めて、より助けを必要とする人を助ける事ができると答えました。ボランティアは、感動しながら硬貨を受け取り、おばあさんに感謝してこの愛の気持ちを必要とする人に渡すと伝えました。

同行したボランティアの林天来さんは花蓮出身で、地震当時は花蓮にいたため、お年寄りの不安や恐れのお気持ちがよく分かりました。彼が花蓮出身だと聞いて、おばあさんはすぐに「ご家族は大丈夫ですか？」と尋ね

ました。「うちは大丈夫です」と答えると、おばあさんはすぐに「よかった！」と言いました。慰めた後、彼女は家にある貴重な陶器を林さんに記念として贈りたいと言いました。互いに思いやる気持ちに、林さんは言葉にできないほど感動し、涙が止まりませんでした。この光景は、同行したボランティアも感動して涙を流し、「彼女たちが少しも不平を言わず、それでもこんなに前向きなのは、心が痛むと同時に感動する」と語りました。

心配を理解し温かい言葉で導く

住民ケアエリアでは、最初は憂いに満ちた表情だった中根さんという住民の方が、ボランティアがお茶とお菓子を出した後、ゆっくりと心の内を語り始めました。数年前に娘婿と夫が相次いで他界し、元々一緒に住んでいなかった娘も、地震で家が損壊した為、彼女と同居する

事になりました。しかし、親子であっても、時には摩擦があり、お互いに声を荒げて不快な思いをする事があるそうです。

同じく子を持つボランティアは、自身の経験を分かち合い、慈済と縁があったのだから、竹筒から始めて、毎日善い考えと福を積み、いつぱいになったら必要とする人の助けになると彼女を励ました。さらに、小さな愛を積み重ね、知らず知らずのうちに母娘関係が徐々に良くなるでしょうと。

中根さんは聞きながら涙を流し、ボランティアが遠くから見舞金を持ってきたことに感謝し、帰ってからボランティアのアドバイスをよく考えてみると言いました。気持ちを吐露した後、彼女はボランティアと名残惜しそうに抱き合ってから別れを告げ、「また会える機会があれば」と言いました。元気がい

日間で二千世帯以上に及び、珠洲市役所の徳田充則課長も市役所職員を代表して心からの感謝の意を表しました。

締めくくりには、特別に意味深い慈済の歌「美」が選ばれました。この歌は慈済の美しさを語り、「与え続ける事」の美しさ、「心と心をつなぎ、手と手を取り合う」事の美しさを表現しています。最後に、慈済の人々は日本語版の「心をつなぐ愛で」を能登の住民の方々と一緒に合唱し、手話で歌詞の内容を表現しました。皆が手を取り合い、最も敬虔で感動的な雰囲気の中で長い友情を結びました。慈済の人々がバスに乗って去っていくまで、住民の方々は名残惜しそうに手を振って見送っていました。しかし互いの心の中では「慈済にいる限り、また会えるはず！」と深く信じているのです。



■ 配布会場で手話の「心をつなぐ愛で」を披露しました。写真 / 日本分會提供

ばいに自転車で来た生瀬さんは、実は八十八歳でした。彼女には金沢に住む息子がいますが、地震後は一人で仮設住宅に住む事を選びました。見舞金を受け取った後、生瀬さんは目に涙を浮かべ、ボランティアたちに何度も感謝の言葉を述べ、證嚴上人と全ての慈済の人々に感謝を伝えてほしいと、ボランティアに必ず伝えてくれと頼みました。「今日は私の人生で永遠に忘れられない日です！」と彼女は何度も繰り返しました。

ボランティアは、困難に直面しても、きつとより良い変化があると信じている、と祝福しました。彼女は「そうですね、能登の方言では『痛くない、苦しくない、感謝せんなん』と言います」と答えました。そう言う、可愛らしくも強い老婦人は、再び元氣いっぱい自転車に乗って去って行きました。

円満な終わり

市長が慈済に感謝

七月十五日は珠洲市第四回目の見舞金配布の最終日でした。午後、珠洲市の泉合満寿裕市長も配布現場を訪れ、感謝の意を表すとともに、配布活動がスムーズに進んでいるかを確認しました。市長は、慈済のボランティアが特別に台湾から珠洲市を支援に来てくれた事に感謝し、自身も台湾を三回訪れた事があり、今後も台湾と日本の芸術家が交流を続ける事を願っていると述べました。

一日中勤務していた私服警官は、慈済がもたらした現金が住民の方々にとって大きな助けになっていると述べ、「慈済の人々の愛情が、この土地と住民にさらなる力をもたらすと信じています」と語りました。

珠洲市での見舞金配布は三

見舞金で愛を伝え 誠心のケアで再建支援



■ 志賀町文化館の入口の前で、慈済ボランティアが地元の方を迎えて案内しています。写真 / 顔福江

慈済基金會は七月十三日から十五日にかけて、第四回の見舞金配布を行いました。これは珠洲市と志賀町の二地域を対象とし、志賀町の富来コミュニティ活性化センターと志賀町文化館で配布することになりました。各会場での配布時間は一日半でした。

訳 / 岩村益典・文 / 日本分會双月刊編集チーム
(文章提供 / 陳靜慧・施金魚・楊景丹・陳思担・吳秀玲・陳雅琴・孫素秋・潘耕美・羅文伶・王孟專・施燕芬)

慈済基金會は七月十三日から十五日にかけて、第四回の見舞金配布を行いました。これは珠洲市と志賀町の二地域を対象とし、志賀町の富来コミュニティ活性化センターと志賀町文化館で配布することになりました。各会場での配布時間は一日半でした。この三日間の活動中、ボランティアたちの熱意と細やかな配慮に地域の人々は深く感動し、多くの人が涙を流しながら人々の温かさを感じました。

活動初日の朝七時過ぎ、東京、大阪、台湾から六十人以上のボ

ランティアが早くも富来コミュニティ活性化センターに到着し、準備を始めました。その後、地域の方々が次々と座席エリアに到着しました。ボランティアたちは温かく迎え入れ、一人一人に暖かさを感じてもらいました。午前八時過ぎ、川岸育子おばあさんが早々と列に並びました。見舞金を受け取った後、涙を流しながら休憩エリアに向かい、感動して「うれしい！」と言いました。彼女は、慈済の見舞金が非常に嬉しく、自分が孤独ではないと深く感じたそうです。「こんなにたくさんさんの地域

の方々が見舞金を受け取るのを見て、本当に感動しました。これで力がみなぎります」と語りました。

見舞金は経済的援助だけでなく、被災者にとって心の支えでもあります。七十五歳の谷口隆夫さんは見舞金を受け取った後、敬虔な仏教徒である自分は、この見舞金を仏壇に供えて、この励ましを大切に自分の心へ

の見舞金を大切に使用していただきます。本当に感謝しています！」と述べました。谷口隆夫さんの誠実な反応にボランティアたちは深く感動し、彼を善行に誘い、社会にさらに多くの前向きなエネルギーをもたらすことを提案しました。

の励ましを大切に自分の心へ戒めたいと話しました。彼は感慨深げに、地震が自分の誕生日に起きたことで心身に試練を与えられ、世の中の無常をより深く実感したと語りました。彼は三つの願いを心に抱いています：感謝の気持ちを持つこと、笑顔で未来に向き合うこと、そして社会に貢献することです。ボランティアから贈られた平安のお守りを大切に保管し、慈済の支援に感謝の手紙を書きました。彼は「ありがとうございます。です、ありがとうございます。こ

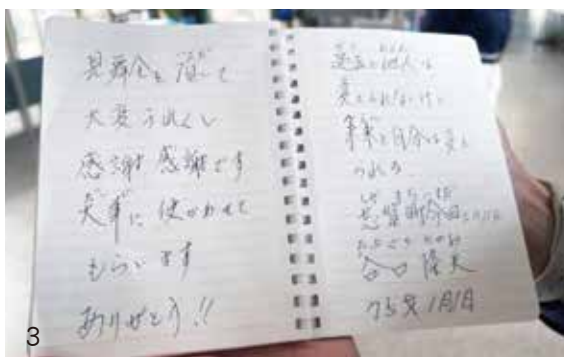
七月十四日、門前町に住む高島仙龍さんが七十六歳の奥さんと共に見舞金配布会場を訪れました。地震当時を振り返ると、今でも恐怖がよみがえるそうです。家族を連れて屋外に逃げ出し、家の中で家具が飛び散る様子を目の当たりにして、とても怖かったと語ります。奥さんは家の片付けをしている際に大腿骨を骨折し、一ヶ月半入院せざるを得なくなりました。この予想せぬ出来事に高島さんは無力感を感じていました。ボランティアは彼を慰めて言いました。「人生の無常さは誰もが経験するものです。私たちボラン



■ 1 見舞金は経済的援助だけでなく、被災者にとって心の支えでもあります。写真 / 孫素秋

■ 2 見舞金配布の現場で、「平安」の飾りが配られて、慈済ボランティアから被災地の方々の祝福です。写真 / 施金魚

■ 3 谷口さんは慈済の支援に感謝の手紙を書きました。写真 / 王孟專





■ 4 慈濟基金會の顔博文執行長（右 3）は地元の方と話をしています。写真 / 顔福江

■ 5 大阪在住のボランティアの李孟潔（左）何度も被災地にきて支援活動をしていた。写真 / 鍾耀賢

■ 6 ボランティアの羅文伶が慈濟を紹介する。
写真 / 施金魚

ティアは世界中のボランティアの祝福を携えてあなたのもとに来了。どうかご無事でいられますように！」高島さんは深く感動し、興奮してボランティアの手を握りしめました。

慈濟基金會の顔博文執行長とボランティアチームは、松田外茂三おじいさんの仮設住宅を訪問しました。おじいさんは喜んでボランティアを迎え、「本当にありがとうございます」と述べました。地震前、おじいさんとあさはさんは山の上にある百五十年の歴史を持つ古い家に住んでいました。その家は二人の思い出でいっぱいでした。おじいさんは無事だった仏壇を見せ、仏様の加護で無事だったことに感謝しました。顔博文執行長は仏壇に刻まれた「無量寿」を見て、おじいさんに「これは阿弥陀仏の別名で、長寿と平安の祝福を象徴しています」と説明しました。この言葉はおじいさん

を大いに慰めたのです。

三日間にわたる見舞金配布活動では、ボランティアたちの温かい交流が、被災後の復興の道のりで、地域の人々に寄り添いと温もりを与え、無限の大愛を証明しました。復興の道のりは長いですが、ボランティアたちの真心のある同行があれば、能登の人々は孤独ではありません。

文化館 愛が集まる場所

二〇二四年七月十四日、志賀町文化館は、慈濟ボランティアの温かさと思いやりに満ちていました。この日は地震発生から一九六日目でした。文化館の中のホワイトボードには、住民同士が励まし合う言葉が書き込まれていました：「地震から一九六日目、頑張ろう！」「春が来ました。能登にも来てくださーい！」「諦めないで！私たちは

遠くにいても、心は近くにありません。大丈夫です！」これらのメッセージは簡潔ながら心のこもったもので、被災地の住民たちを励まし合い、ボランティアの心も温め、皆に希望を与えていました。

イベント当日、ボランティアたちは早朝から文化館に到着し、会場の準備を整え、『大愛全記録』を上映して、慈濟の能登地震後の救援活動を振り返りました。顔博文執行長は自ら町役場の職員に頭を下げ、両手で記念品を渡して感謝の意を表しました。彼は誠心誠意、住民の皆さんが早く日常生活に戻るよう祈り、広々とした配布会場を提供してくれた役割に感謝を述べました。

活動中、ボランティアは地域の方に「竹筒歲月」の精神を共有しました。甲野志津子夫妻はこれに感動し、店の小銭を集め

て慈濟に寄付しました。その後まもなく、志津子さんは三つのクッキー缶に小銭を詰めて持ってきて、慈善の海に投げ、愛の心で他人を助けました。この尽きることのない愛は、泉のように被災地を潤し、日本人の善良さと無私の心を示しています。

八十三歳の新高清二おじいさんは、地域のケアエリアでボランティアと交流し、慈濟の理念を理解した後、こう言いました。「台湾と日本は昔から互いに助け合うパートナーで、みんな一つの家族です。人が困難に直面したとき、お互いに助け合えば、みんな幸せになれます」彼はこの歴史を子孫に伝え、若い人たちに互いに助け合うことの重要性を理解してもらいたいと願っています。この無私の愛は菩薩の心から生まれ、社会をより良いものになっています。

慈濟日本分會の副執行長であ

る蘇美菁は財務を担当しています。彼女は煩雑な業務に不平を言うことなく、次のように述べています：「日本人の強さを学びたい。彼らは困難に直面しても、明るい面を見せ続けます」蘇美菁は地域の人々に頑張るよう励まし、見舞金が災害後の復興に励めをもたらし、志賀町が太陽の光に愛される場所になることを願っています。

イベントの中で、八十二歳の畑中悠紀子おばあさんが注目を集めました。彼女は能登地域にある四百年の歴史を持つ古民家に住んでおり、そこは山と海に囲まれた自然豊かな場所です。おばあさんには三人の子供がいましたが、そのうちの一人が三十三歳で亡くなり、毎日涙が止まらず日々を過ごすのが困難でした。今回の地震で、彼女の古民家は「半壊」と判定され、家の中は壁が崩れ、床が陥没しましたが、仏壇の前の観音像はま

■ 財務組は見舞金の数を用意している。写真 / 孫素秋

■ 会場の出口でお土産を渡している。写真 / 顔福江





■ 見舞金配布の会場でボランティアと地元の方。写真 / 施金魚



■ 役場の山下光雄さんは（右）親切に対応する。写真 / 施金魚

だ立ったまま家を守っています。おばあさんは、寂しくても簡単には諦めず、家を守る責任を担うと話しました。

地震の際、おばあさんは、家の「大黒柱」をしつかりと抱きしめました。この四百年間古民家を支えてきた柱は、強い揺れの中でも立ち続け、家全体を守りました。彼女は長年作り続けてきた切り絵作品を見せ、ボランティア達は彼女の芸術的才能に深く感銘を受けました。おばあさんは切り絵を通して心の強さを表現し、人々と愛と美を分かち合っています。

横浜出身の菊池おばあさんは、見舞金を受け取るとすぐに涙を流して言いました。「誰がこんなに私に親切にしてくれるの！」ボランティア達は笑顔で彼女の健康を祈り、おばあさんは涙ながらに微笑み、心から感謝していました。地震後、富来

活性化センターは避難所となり、最多時には二百人以上を収容しましたが、現在は十四人の住民しか残っておらず、菊池おばあさんもその一人です。彼女は高齢で一人暮らしをしており、家が地震で損壊したため、もう住むことができません。ボランティア達は彼女に寄り添い、この損壊した古い家に戻りました。これは地震後三回目の帰宅で、荒廃した光景の中をゆつくりと見回り、どの隅も思いうでいっぱいでした。「ここが私の寝場所だったの」と彼女は言いました。彼女の目は優しく、まるでこれらの苦楽を共にした物や壁を慰めているかのようでした。

十四日午後、ボランティア達は志賀町文化館で見舞金の配布を開始し、十五日早朝、チームは再び文化館に集まり、能登での最終日の配布準備を行いました。この二日間の活動は、町役

場の総務課課長である山下光雄氏が全面的に担当しました。配布会場の管理者として、山下課長は常に熱意を持って忙しく働き、物資の運搬や会場の調整など、すべてに熱心に取り組ましました。彼は感慨深げに語りました。「慈済会の仲間達が台湾、東京、大阪から配布を手伝いに来てくれたのだから、私も全力でがんばります！」

活動終了後、ボランティア達はその場にいた地元の人々と別れを告げ、皆で将来お互いに支え合い、生活の困難を共に乗り越えていくことを約束しました。今回の能登地震により、台湾と日本の絆はさらに深まり、災害の中で愛の種が蒔かれ、お互いの人生がもはや孤独ではなくなりました。この愛のエネルギーは、人々が勇敢に前進する力となり、彼らを導き続けるでしょう。

時地

◆能登災害支援 ◆助學見舞金配布 金澤市

金沢工業大学助學見舞金配布 学生達に希望の光を

能登半島地震において、珠洲市、輪島市、能登町、穴水町、七尾市などに住む四十九人の学生の家庭が被災し、それにより厳しい生活となっていました。大学側は学費の半額を補助し、さらに慈済からの追加支援により、学生達が安心して学業に集中できる環境を目指しました。

訳 / 洪秀瑩・文 / 日本分會雙月刊團隊整理
(文稿提供 / 楊景升・吳惠珍・林淑懷)

七月十七日日本分會、台湾本部、さらに能登地域、計二十六名の慈済ボランティアが金沢工業大学を訪問し、奨学見舞い金の配布をおこないました。

励ましの言葉が学生に最大の力

慈済基金会の代表・謝景貴氏は「この見舞金には全世界の慈済人の愛が込められています。将来、皆さんに少しでも余裕ができたなら、ぜひ一緒に他の人達を助けていきましょう。そのために明確な目標を持ち、前向きに進もう」と学生達を励ましました。

愛は痛みを癒す

学生達は、慈済が一月から能登で温かい食事を提供し、見舞金も配布していると聞き、感動していました。人々の優しさが感じられ、特に台湾の慈善団体からの支援ということが心に響いたようです。さらに今回、学費助成金支給により大きな励みを頂いたと、慈済に感謝していると思っただけでした。

学生のひとり吉田さんによると「台湾の仏教慈済基金会は、地震後も長期にわたって私達を支援し、見守ってくれました。私達能登の人々はとても感動しており、強く生きる気持ちがよく強くなっています。未来への希望も湧いてきました。」

もうひとり洲上さんも「私は

アルバイトをしています。それで生活費全部を賄うには足りません。この慈済の援助見舞金のおかげで、親の経済的負担も軽くすることができました」と話しました。

今回の援助見舞金の給付は、地震で被災した学生達に緊急経済支援を提供しただけでなく、心を慰め、励ますこともできました。慈済及び金沢工業大学の全面的な協力により、誰もが災害後再び、学業と生活を両立できることを期待しています。

慈済やすべての善人の協力によって、学生達は困難の中でも成長し、より明るい未来へ歩み続けます。

時地



■ ボランティアが学生たちにお土産の内容を説明している。写真 / 吳惠珍

能登災害支援 ◆ 見舞金配布
第二回 穴水町

住民とボランティアが心を合わせて

訳 / 洪秀瑩・文 / 日本分會整理
(文稿提供 / 林淑懷・楊景卉・吳惠珍・孫素秋)



■ やっと見舞金を受け取る事が出来て、米田おばあさんは感謝の意を述べた。写真 / 吳惠珍

七月十六日「穴水町さわやか交流館プルート」にて穴水町第二回見舞金配布を行いました。対象は第一回支給時に受け取れなかった人たちです。米田おばあさんは、娘さんに付き添われて見舞金を受け取りに来ました。今回は通知を受け取れず来られなかったそうです。今回は新聞の折込チラシで第二回の支給がある事を知り、娘さんと一緒に来たとの事でした。ボランティアの手から見舞金を受け取った時、おばあさんはとても感動して涙を流しながら言いました「このお金が本当に助かる時に来て、本当に感謝しています。」

終わりではなく 新たな始まり

八十歳を過ぎた老夫婦が見舞金を受け取りに来たが「罹災証明書」を持っていませんでした。会場の役場職員が、証明書を役場で申請し、受け取ってから再

度来て欲しいと伝えました。そのあと状況を確認してみると、老夫婦の家の損害状況は慈済の見舞金支給基準に合わなかった為に罹災証明書を受け取っていませんでした。それでも念の為にボランティアの中村省吾が、夫妻と共に資料を調べたところ、石川県と穴水町が提供する災害支援金十五万円を申請できる事がわかりました。早速手続きを進め、夫妻は安心しました、おじいさんは声を詰まらせながら「本当に心配していました。耳が悪く、手足も不自由で、記憶力も落ちていたので、今日こうしてあなたが一緒に申請手続きを手伝ってくれなければ、どうしていいかわからなかった。本当に感謝しています」と、おじいさんは涙を拭きながら感謝の言葉を話してくれました。

いた「再会」の為に、九十歳の若林おばあさんを訪ねました。元気いっぱいのおばあさんは、みんなを自分の団地に案内してくれました。「私は台湾が大好きで、娘も一緒に大好きです。今日は台湾から四人が来てくれたので、絶対に娘に伝えなきゃ！」とおばあさんは言ってくれました。皆でおばあさんと一緒にたくさん写真を撮りました。「今が私の人生で一番幸せな瞬間です」とおばあさんは喜んでくれました。

時地

能登災害支援 ◆ 見舞金配布第二回 能登町

能登町での二次配布 町長から感謝状贈呈



見舞金を手渡す際、多くの住民が「これは本当ですか?」と疑問を抱きました。「これは世界中からの愛です。大切に受け取ってください。」地震は台湾と能登の縁を結びました。この縁が途切れる事なく、より多くの人が善行を行い、福をもたらす事を願っています。

七月二十六日正午、ボランティアは能登町長の大森凡世氏を訪問しました。チームには地元住民の修田勝好さんも同行しました。彼は慈済の支援とありがとうございました。彼らに感動し、「0403花蓮地震」の被災者を助けるために貯金した小銭を寄付し、さらにボランティアとして配布の案内を手伝いました。

一行が町長のオフィスフロアに到着すると、全ての職員が立ち上がり挨拶をしました! 思いがけない歓迎に驚きつつも、能登の住民を助けられた事に喜びを感じました。大森町長は慈済への感謝を表し、「見舞金は高齢者に実質的な助けとなり、慈済の方々の温かい笑顔と誠実な思いやりは忘れがたいもので

す。能登町と慈済の交流が永遠に続く事を願っています」と述べました。

許麗香執行長は證嚴上人と全世界の慈済メンバーを代表して、「能登町が慈済に機会を与えてくださり、能登の人々の善良さと親切さを感じる事ができ、多くの住民と深い縁を結び事ができた事に感謝します。今後もお茶を飲んだり、おしゃべりをしたりする機会がある事を期待しています。その際は町長にもご協力いただければと思います」と述べ、能登との良い縁に感謝の意を表しました。

贈呈式は簡素で誠実なものでした。大森町長が感謝状の内容を読み上げ、許麗香氏が代表として受け取り、両者が丁寧に礼

を交わしました。式の後、全員で記念写真を撮影し、思い出に残る瞬間を捉えました。

知り合ってからわずか百日余りですが、素朴な能登の住民はすでに慈済のメンバーを古くからの友人のように扱っています。通常は控えめで保守的な印象を与える日本の地方住民が、その真心と熱意でボランティアに感謝の意を表しています。能登の美しい山と海は花蓮によく似ています。台湾で最も美しい風景が人々であるように、ボランティアの心の中で、能登でも美しい風景もまた、この強靱で粘り強い能登の人々なのです。再会を心待ちにしています。それは遠くない秋に、そして年々歳々訪れる事でしょう。



特別な縁 未来への絆

時地

◆能登災害支援 ◆穴水町

役目を果たす 慈済カフェ

訳／鄭盧欣・文／日本分會整理
(文章提供／許麗香・陳文絲・朱秀蓮・施美君)



二〇二四年一月一日午後能登半島で $M7.6$ の地震で大地を揺らし、津波と火災を引き起こし、石川県に甚大な被害をもたらしました。

一月十二日、慈済日本分會の東京と大阪から十四名のボランティアは被災地へ、翌十三日から穴水町の「さわやか交流館ブルート」で炊き出し活動を展開し、更にその翌十四日から二つの班に別れ、穴水総合病院でも同時に炊き出しを始められました。日々四、五百人分を用意し二十九日までと続いた炊き出しも一段落を終え、地元住民とまたの再会を誓いました。

小さな空間大きな役割

二月十六日、穴水総合病院にて二回目の炊き出しが決行されるのと共に、憩いの場として、慈済のお茶（浄斯烏龍茶）、ホッ

トココア、ホットコーヒー等を提供する「慈済カフェ」もオープンするに至りました。

慈済カフェの発起は、ボランティアの間で、炊き出しを提供する以外に、地元の方々が落ち着いてお話ができる場として設けてみてはとの声からでした。会話が弾むようにと用意された冊子で互いに読んだ感想を交わすなどして交流の場となっていました。

お茶とコーヒーの香りに誘われ、次第に医療従事者や患者さん、被災の方々やレスキュー隊員もこの憩いの場へと足を運ぶようになりました。

ありがとう慈済 心の癒しを

その後、五月から七月にかけて四回に渡る見舞金給付活動も無事に終え、役目を果たした慈

済カフェも七月二十五日を以て終了となりました。翌二十八日、慈済ボランティア一行が病院で別れを告げる際、島中院長を初めとする病院関係者が病院玄関ホールに集まり、感謝の意を表されました。

また、地元の脇本さんからは、感動した貴重な想いで「常に心から感謝しております。感謝の言葉以外見つかりません」と表されました。

病院側から花束と「多謝慈済」と書かれたうちわを慈済に贈られ、島中院長は「最も大変な時に慈済が付き添い、炊き出しを続けて、慈済カフェでお茶やホットココアとコーヒーを入れてくれたのは最大な心の癒しとなりました」と表されました。温かなありがとりの響きがホール中にこだまします。

浄斯

◆能登災害支援 ◆見舞金配布第五回 七尾市

能登七尾に愛を 五回の見舞金配布が完了



■ 初日見舞金配布の「矢田郷地区 コミュニティセンター」で列が出来た。写真／朱家立

七月十四日、見舞金の第五回目の配布が八月三十日から三日間行われ、今回は八十二名のボランティアが動員されました。

訳／岩村益典・文／日本分會雙月刊團隊整理(文稿提供／楊采蓉・張美齡・吳惠珍・潘翠微・小林由意・潘翠微・楊景升・施燕芬)

日本からも台湾からもボランティアが参加し、国籍や年齢に関係なく、心を一つにしてこの愛と祝福を被災した地域の方々に直接お届けしました。Aグループのボランティアは七尾市文化ホールの「矢田郷地区コミュニティセンター」で配布を行いました。一方、少人数のBグループのボランティアは、翌三十一日から中能登町、輪島市、珠洲市、志賀町へ向かい、二回目の配布を実施しました。

お見舞金は大きな助けに

三十日、午前六時には、「矢

田郷地区コミュニティセンター」に既に地域の方々が到着していました。最初に会場に來られた伊豆あばあさんは、癌のため体力が弱く、持参した小さな手押し車に頼って歩いていました。七十五歳の彼女は、お見舞金を受け取って感動し、病院に通う必要があるため、「少しどころか、大きな助けになります」と話しました。

島田さんという女性は、台湾からお見舞金が配られると聞いて驚き、「本当ですか?」と市役所に電話して確認したそうです。宗教についてあま



■ ボランティアの李浩溶（右）は見舞金申請書類の書き方の補助をする。写真/ 孫素秋



■ 竹筒を孫達に福を植える。写真/ 吳惠珍



■ 「竹筒歲月」精神と慈濟日本志業を説明する。写真/ 孫素秋



■ 最後の一組の罹災証明書の確認と案内をする。写真/ 吳惠珍

を歌っているうちに思わず涙を流しました。そして「家に帰ったら、お見舞金の三つ折りの封筒を額に入れて飾ります」とも言っていました。

水谷さんは台湾の慈濟が見舞金を配布すると聞いた時、最初は詐欺だと思い、信じられませんでした。証厳上人のお見舞いの手紙を見たときには、さらに感動しました。一九九六年に慈濟が三十人の主婦達によって始まり、日々五十銭を貯金する「竹筒歲月」について聞いたとき、彼女はすぐに賛同し、竹筒を持ち帰って孫達に自分の福を植えさせる事にしました。

一 家族 風雨の中で支えあう

午後二時過ぎ、太陽の照りつけがやや和らいだものの、広場の待機エリアはまだおし暑かった。ボランティア達は

すぐにお茶を振る舞い、長時間立っているのが困難な地域の人々に椅子を提供した。謝景貴さんは地域の人々と熱心に交流し、「こんなに暑い中、長時間お待たせして申し訳ありません！」と声をかけた。数人のボランティアが前に出て「一家族」の手話を披露し、

地域の人々から熱烈な拍手を浴びた。慈濟の愛と思いやりは、一人一人のボランティアの献身を通じて、被災した地域の人々に一人一人の手に届けられた。どんなに大きな風雨にも関わらず、思いやりの心は途切れる事なく、地域の人々の心の中で最も温かい支えとなっている。

微風と小雨の中 心は温かく

翌日、三十一日の朝六時、微風に小雨が混じり、台風が接近し、空は灰色に覆われていた。配布会場に到着すると、

列は既に広場の外まで伸びていた。ボランティア達は素早く雨よけラインを張り、雨に濡れないようにした。前日の経験を活かし、直線的な動線を設け、番号を地面や椅子の背に表示し、会場をより整然とさせた。

見舞金を受け取りに来た最初の人は七十二歳の大山さんで、朝から会場で待っていた。彼の家は地震で損壊し、現在は友人宅に一時的に滞在している。また、松井おばあさんは、台湾の慈濟が見舞金を配布すると聞いて、「この美しい夢は本当に叶うのだろうか」と思っていた。当日会場に来て、ようやくこれが全て現実だと信じられ、感動で目に熱い涙を浮かべながら興奮して言った。「とても嬉しいです。心の中がとても温かくて信じられません。どうして見知らぬ人がこんなにたくさんさんの現金をくれ

るのでしょつか。」

五十歳の山田さんは父親の代わりに慈濟の見舞金を受け取りに来ました。彼女は、最も無力で助けを必要としていた時に慈濟が援助してくれた事に感謝の意を表しました。ボランティアが直接見舞金を手渡したとき、山田さんも感動して涙を流しました。彼女は、この見舞金を受け取りはしたものの、いつかは自分も人を助ける側になりたいと希望を述べました。帰る前に、三つのお守りを余分に求めました。一つは父親に、一つは二年前に亡くなった母親の仏壇に、もう一つは都会に住む兄に渡す為です。そして、台湾の慈濟が見舞金を配布した善行について彼らに報告するつもりだと言いました。

辻井さんは墓石彫刻の職人で、ボランティアから慈濟の

「竹筒歲月」の話を聞いた時、彼は突然バッグから硬貨でいっぱい茶缶を取り出し、一つずつ竹筒に入れ始めました。三つ目の竹筒に入れているときに、車の中にもお金がある事を思い出し、すぐに取りに行つて、全ての竹筒を満杯にしました。彼は「これらのお金も、もっと必要としている人々の助けになればいいです」と心からの思いを表現しました。この善行は小さな流れのようですが、大海を形成するのです。会場を離れる前、辻井さんはもう一つ竹筒を持ち帰りました。以前家の整理をしたときに見つけた硬貨を、家に帰ってから竹筒に入れて寄付しに来ると言いました。

配付最終日 円満に終える

慈濟の見舞金配布に何度も参加した七尾病院の陳文筆医

師は、地元の二十人以上の住民にボランティアとして参加するよう呼びかけ、台湾と地元住民の力を集めました。彼は、手順に精通しており、配布エリアの入り口に立って、異なるグループの住民を誘導し、配布と受け取りの署名を待つ列に並ぶようにしました。台湾から来た人も、日本から来た人も、更には地元のボランティアも、それぞれが自分の力と善意を尽くす事で、マグニチュード7.6の地震救援活動に人間の輝きを満たす事ができたと信じています。

小さな善行に見えますが、それは善の種のようなもので、この被災地に根付き、芽を出し、徐々に地域再建の堅実な力となっています。配布は単に住民を助けるだけでなく、大きな愛の種を蒔く事でもあり、それが芽を出して大きな木になり、より多くの人々を

Ⅱ 能登災害支援 ◆ 見舞金配布 第二回 輪島市 志賀町 珠洲 中能登町 四市町村見舞金二次配布 誠なる愛で大切な 心を届く

訳 / 魯萍萍・文 / 日本分會整理 (文稿提供 / 楊采蓉・楊景卉・朱家立・鐘耀賢・陳靜慧)



今回の配布活動はAとBに分かれました。Bグループは四つの町市の介護施設に住む高齢者や、他市への避難者を対象に二次配布を行いました。温かな心と祝福を届けることを目的としています。

八月三十一日午前、Bグループのボランティア二十名は朝から輪島市役所に向かいました。市役所が七時半に開門するとすぐに、役所職員と協力して会場の準備を迅速に整えました。

最初に列に並んだのは吉岡さんという男性で、朝六時に自宅を出発して待っていました。彼は親戚から二次配布の情報を聞き、「見舞金を使って家の修理をしたい。まずは床と壁を直す」と話していました。また、近所に住む水洞さんは地震発生後に救助用ヘリコプターで金沢市へ

■ 珠洲市二次配布現場様子。
写真 / 朱家立

避難した為、初回配布を受け取れなかったそうです。

この日は地元のボランティア五名も活動に参加し、その中の一人、地元輪島出身で会社員の古畑訓さんは、「家族と一緒に仮設住宅で生活しており、家の梁や柱がまだしっかりしているので、見舞金を家の再建に使いたい」と語りました。慈善活動に感謝し、ボランティアとして参加したとのこと。

午後には志賀町の富来活性化センターへ移動し、役所職員五名とともに準備と配布に取り組みました。ボランティアの池田浩一は、配布チームの責任者と運転手を務めました。「配布の対象者は毎回異なりますが、思いは一つ。地元の皆さんが一日も早く地震による住宅被害の痛みから立ち直れるよう願っています」と話していました。

九月一日、Bグループのボランティアは、午前中に珠洲市産業センターで配布を行い、市役

静観

所職員十名が協力しました。八十代の野村さんは地震後に老人ホームへ入所しており、今回見舞金を受け取る為、朝六時半に老人ホームを出発してバスとタクシーを乗り継ぎ会場にきました。「この見舞金で地震で壊れた夫のお墓を修復したい」と感謝の言葉を述べていました。

同じく午前中、中能登町の「生涯学習センター」では、六名の小グループが準備を進め、市役所職員五名が協力しました。胡摩さんという男性は体調不良で入院中に初回配布を受け取れなかったそうです。また、八十七歳の長淑子さんは親戚から連絡を受けて今回の配布を知り、無事に見舞金を受け取りました。

初回の見舞金配布を受け取れなかった多くの方々の為、今回の二次配布ではボランティアと役所職員が再び協力し、誠意を尽くしました。誠なる愛が行き届き、真心からの祝福が届けられますように。



■ 仮設住宅で清掃の手伝い。写真 / 孫素秋

◆ 能登豪雨災害支援 ◆ 能登町

清掃と稲刈り ならお任せ

二〇二四年元旦、強震に見舞われた能登半島。その九ヶ月後の二十一日に、豪雨は突如として激しく降り、洪水となり押し寄せました。

訳 / 吳愈輝・文 / 日本分會雙月刊團隊整理 (文稿提供 / 王譽業・陳麗芬・陳靜慧・吳惠珍・吳秀玲・楊景卉)

トル以上の浸水被害を受け、ここに住む地震被災者達は再び拠り所を失いました。二度目の災害となるこの水害は、地域住民の心身を疲弊させました。しかし、この困難に立ち向かう為日本各地から集まったボランティア達は復興を目指し、再び結集しました。

仮設住宅で女性達の活躍

二十七日の朝、豪雨災害支援団は二つのチームに分かれ、そのひとつは仮設住宅の住民を支援しました。住民達は慈濟から地震見舞金を受け取っており、さらなる支援に笑顔を見せてくれました。泥だらけの家を清掃

中の本郷氏は、慈濟ボランティアを自宅に案内し「市に援助を申請したけど、いつ来るかわからない。荷物は外に出すのはとても大変なんだ」と溜め息をつきました。

独居高齢者も多い仮設住宅では住民がひとりで困難に直面している姿も多く、ボランティア達はすぐに清掃作業を開始しました。六十九歳の橋本さんは病気の夫に代わり、自分で家のなかを片付けていました。「あなた達が来てくれるなんて、まるで奇跡みたい。二度の災害で本当に希望を失いかけていたけど、あなた達に会えて希望が見えた」と話し、感激のあまり抱きしめようとしたのですが、汚

田畑で稲刈り作業も可

今回の洪水は被害面積がかなり大きく、農地だけでも約七〇〇ヘクタールが浸水被害を受けました。ボランティア達は二十八日も仮設住宅の清掃作業を予定していましたが、被災した農地を目の当たりにし、修田勝好氏と彼の友人である多賀章利氏の二つの農家を支援し、泥の中に浸かった稲の収穫を手伝うことを決めました。

干場家良氏は「地震の後、やつ

「地震の時も酷いと思ったけど、それでも未来を想像して、できることを考えました。でも、今回の水害では未来を思い描く力さえ湧きません」修田勝好さんは窓の外に目を向け、土石流に覆われた田畑を見ながら、声に哀しみを滲ませました。

輪島市宅田第二仮設住宅団地は低地に位置する為、一メー



■ 陳文筆医師も稲かりを手伝いに来た。写真 / 吳惠珍

た。彼が車でボランティア達を案内しながら能登町の農地被害を見せていた際、何度も窓の外を振り返っていました。ボランティアが「何を考えているのですか？」と尋ねると、彼の答えは「この農地をどうすればいいのか？まだ耕作できるのだからか？」でした。

初挑戦の「素人」でも活躍

水田へ向かうなか見えるのは、豪雨による土石流の流出、山肌の露出、稲田の損壊と、その惨状に誰もが深い嘆きを禁じ得ませんでした。この辺りの農地はどれも深刻な被害を受けていました。

二十八日の朝、稲刈り作業に参加するボランティア達が能登町に続々と到着しました。東京、大阪、群馬から集まったメンバーや、地元能登の吉田忍氏、さらには陳文筆医師夫妻、留学生を含む二十九名のメンバーが

揃いました。

修田氏は感謝の気持ちを述べ、被害を受けた稲田に案内し、倒れた稲を刈り取って道を作る方法を説明しました。その道を使って稲刈り機が入れるようにする為です。

普段は手術用のメスを手にする陳医師ですが、この日、鎌を持つ手つきもプロのようでした。陳医師曰く「慈濟からのお誘いを受け、今日はここでボランティアとして活動しています。石川県の動員により、この二日間で多くのボランティアが能登に入り、被災した住民を支援しています。彼らは主に被災した仮説住宅の清掃に集中しています。一方で、慈濟は被災者のニーズをさらに深く考慮し、行動を配慮しているところが素晴らしいと思います」

稲刈りの際、ボランティアが迅速かつ懸命に働く姿を目の当たりにし、皆さんの働きぶりは私の予想をはるかに超えて素晴らしいものでした。

らしいものでした。私にとってこれは大きな力となり、さらに前に進む勇気を与えてくれました」と笑顔で話されました。

多賀章利氏は四十年間農業を営んできました。その三ヘクタールの土地がすべて被災しました。地震による山崩れで土石流が発生し、その後さらに豪雨に襲われたことで、彼ひとりでは全く手がつけられない状態でした。当初は稲を諦めるつもりでしたが、ボランティア達の活動に接し「皆さんは『素人』かもしれませんが、その元気で明るいエネルギーが私に立ち上る力を与えてくれました」彼はこつ話してくれました。

ボランティアの謝景貴氏は、皆で集い支え合う絆を家族のよう感じ、その結びつきが時を経て輝きを失わないことに感謝し「災難が続いても、逆境の中から希望を見だし、みんなと一緒に前へ進もう」と皆を励ました。

静電

◆能登豪雨災害協力隊 ◆ 輪島市

試運用愛を集めて 清掃活動を支援



志工服を着用し皆の力を集約

十月一日、支援協力隊の試運用初日。本日は鮎井豊明氏の自宅の清掃を支援することでした。協力隊参加者達は「支援協力隊○○○○ー」と円陣を組んで士気を高め、行動を開始しました。慈済ボランティアが彼らにボランティアベストを着せると、早速作業を開始し、泥まみれの家具や雑多な物を家の外に運び出しました。

まずは家具を屋外に運び、水に浸かつて重くなった畳を一つ

一つ解体して外に出します。慈済ボランティアを含め十人未満の人手で、汚泥まみれの家を清掃する作業は非常に骨が折れるものでした。

「これはお互いに励まし合い、支え合う力ですね！」協力隊員の全身汗だくで力を含わせて任務をやり遂げる姿に、ボランティアはこう感じました。最後に隊員たちが水で床を洗い流し、家が少しづつ元の姿を取り戻しました。きれいになった部屋は、鮎井氏にとって、そこで生活する気持ちを再び呼び起す

しました。

「慈済には感謝、感謝、また感謝です！あなたたちの温かさで支援のおかげで、前に進む力を得ました。」鮎井氏は感謝の気持ちを語り、「いただいた支援金を大切に使い、将来的には自分ができる範囲で恩返しをしたい」と述べました。

慈済ボランティアたちは、こういう愛のエネルギーが大きく広がれば被災地の住民たちが家を再建する力となり、未来がもっと近く感じられるようになる」と信じております。

静電

遠くからの温もり豪雨の後輪島へ愛を携える

訳／李曉萍・文／日本分會雙月刊團隊整理
（文稿提供／陳靜慧・楊景升・施燕芬・孫素秋）



- 1 カビの生えた畳をトラックに積むボランティア。写真／楊景升
- 2 雨の中、被災者の仮設住宅で型付け作業を手伝う。写真／孫素秋
- 3 被災者に毛布と平安のお守りを渡しました。写真／孫素秋

十月一日から三日間、毎朝七時、ボランティアたちは自分で準備したおにぎりを昼食として持ち、輪島市の豪雨後の被災地支援に出発しました。市政府はまだ使用されていない「輪島観光旅行相談センター」をボランティアの拠点として提供しました。

二日、「能登豪雨災害支援協力隊」の活動が正式に始まり、ボランティアはグループに分かれて行動を展開し、愛の伝達は一刻も休むことなく続きました。三日朝、輪島では大雨が降り、気温は十七度に急降下しました。

慈濟の毛布を身にまとい心も温まる

三日午前九時、雨の中、ボランティアは山岸町の「山岸第二団地組合屋」を訪れ、外畑さんに会いました。外畑さんは慈濟の見舞金の受益者で、これを

きつかけに慈濟のボランティアと知り合いました。前日に彼女はボランティアと再会し、自宅の団地が水害の影響を大きく受け、畳が浸水してカビが生え、掃除が大変だと話していました。ボランティアたちはその状況を理解し、助けを始めました。

地元のボランティアで看護師の南里美さんは、外畑さんに、泥水に浸かった畳は細菌が繁殖し、再利用できないことを説明し、畳を捨てることを提案しました。そこで、家主は市役所の職員と緊急に連絡を取り、確認後、畳を小型トラックに乗せて廃棄場へ運びました。

掃除が終わった後、ボランティアは特別に慈濟の毛布を四人の協力隊の地域住民に贈りました。その中で、馬場さんは毛布を受け取り、「この毛布は本当に温かくて軽く、色も美しい！」と何度も言いました。豪雨後の土石流で橋が壊れた為、彼は今も家に帰れず、毛布を触



りながら「身につけているのはこの服だけで、今はこの毛布があつて、本当に雪中送炭だ」と言いました。ボランティアは彼にもっと物資を送ることを約束し、冬を越えるよう支援することになりました。

外畑さんは涙を浮かべながら言いました。「皆さんの支援は私にとって大きな意味があり、本当に感謝しています。地震以来、心の中でずっと痛みを感じていましたが、今、皆さんが私を訪ねてきてくれて、とても大きな励みになりました。」二度目の災害に見舞われた住民にとって、一言の挨拶や祝福の言葉が、力となるのです。

信頼と支援で台日はまた会つ日を約束する

三日の午前中に二軒の住民を忙しく助けた後、ボランティアたちは午後には再び輪島塗職人の鮎井辰也さんを助けに向かいま

した。鮎井さんの家は小さな山の傍に位置しており、大雨で泥土が家に流れ込み、一階はすべて泥だらけになり、家はもはや住める状態ではなく、解体を余儀なくされていました。九月三十日、ボランティアたちはこれを知り、物品の分類と救出を手伝い、有用な物品を親戚の家に運ぶ手伝いをしました。

勘災チームは小伊勢町にも向かいました。この地域は今回の水害で最も深刻な浸水区域と認定されており、街道には泥や流木がまだ残っていました。その時、水位はコミュニティ全体を浸水させていました。

三日、ボランティアたちは再び彼の倉庫と作業場に訪れました。ここにある物品は水害の影響でほとんど再使用できなくなっており、多くの半完成品や機械は廃棄せざるを得ませんでした。ボランティアたちは、見た目がまだ良好な作品を見つけ、これを台湾でチャリティー

販売して資金を募ることができたか尋ねましたが、鮎井さんはこれを断り、完成品で恩返ししたいと強く言いました。彼は毅然とした目でこう言いました：「私は職人です。自分には自尊心と誇りがあります。」彼の頑固さと誇り高き姿勢に、ボランティアたちは深く感動しました。

元旦の地震で鮎井さんはすべてを失いました。彼は言いました。「だから私は泣いた。八ヶ月以上努力してきたのに、水害が再び襲ってきて、どうすればいいのか全くわからなくなりました。ただ笑うしかなかった。」しかし、この日、感動して鮎井さんは再び泣きました。「こんなに遠くから来て、私の周りを囲んで、こんな情と大愛を注いでくれて！」ボランティアの温かさに触れ、彼は思わず涙を流しました。ボランティアたちはその後、円を作り、肩を組んで彼を励ました。



私の愛で
より多くの人々を助ける

連日、別の小グループのボランティアが宮野婆さんの家の整理を手伝いに行きました。宮野家は豪雨で一メートルの高さまで浸水し、水が引いた後、年配の夫婦が自力で掃除をしました。が、高齢の為、どうしても力が足りませんでした。

ボランティアたちは約束通りに助けに来て、宮野婆さんはエプロンと腰用サポーターを着けて、ボランティアに客間とリビングの掃除を指示しました。水に浸かった畳を運び出し、泥が付いた家具や鍋、食器を一つずつ拭いていきました。泥水が家の中を浸水させ、家を見るも無残な状態でしたが、ボランティアの手伝いを受けて、二人の高

■ 1 鮎井さんの倉庫と作業場で片付け作業の手伝いをするボランティア。
写真／孫素秋

■ 2 鮎井さんにエプロンとサポーターを手渡ししました。写真／孫素秋

齢者はようやく少し笑顔を見せました。

作業が一段落し、ボランティアが義援金を手渡すと、お婆さんは感謝の気持ちを込めて言いました。「私たちは年金で生活していますので、今回の支援金は私たちにとても大きな意味があります。」お婆さんは続けて言いました。「一番の喜びは、家族の為に美味しいご飯を作ることです。援助金をいただいたので、野菜を買って食事を改善したいと思っています。」

継続的な関心と
協力の手を携える

輪島市中心の河井町にある重蔵神社は、千年以上の歴史を持ち、水害の最も深刻な地域の一つです。地元の神社の神主である能門亜由子さんは、復興とボランティアの組織を担う責任を果たしています。彼女は、地震後にすべてを失ったものの、互

いに助け合う力が自分を支える原動力であることを実感したと述べています。ボランティアたちの継続的な支援によって、彼女の心にも安らぎが見つかりました。

十月三日午後、勸災チームは能門さんに別れを告げ、今後の復興活動で引き続き協力できることを願いました。愛の結集と力が、輪島の住民たちが風雨の後に希望を見いだす手助けとなることを期待しています。

ボランティアリーダーの謝景貴さんは皆に感謝の気持ちを伝えました。「市政府の支援に感謝し、私たちの『働くことで支援する』計画が無事に実現しました。地域の皆さんが私たちを信頼してくれたので、私たちの一歩一歩は感謝の気持ちで満ちていなければなりません。」この相互支援と感謝の気持ちで、ボランティアチームが前進し続ける最大の原動力となっています。

静観

親子ボランティア

高校生の江原宏益さんは、夏休みを利用して母親と共に東京から能登を訪れ、見舞金の配布活動に参加しました。「生まれ育った土地で、地元の方々のお手伝いができることを嬉しく思います」と語りました。

宏益さんは見舞金配布の窓口で高齢者の対応を担当し、九十七歳のお年寄りが台湾に深い思い入れを持っていることに触れ、台湾からの支援の想いを地域の方々に届けられたことに大きな意義を感じました。

母親の黄韻璇さんは学生時代の慈済活動がきっかけで参加し、今回は活動の運営と記録を担当しました。「私は三代目の慈済家族で、夫も活動を支援しています。息子と共に



■ 慈済青年隊の江原（右）はお母さんと一緒に見舞金配布活動に参加しました。写真／蔡鳳寶

1 ボランティア物語 ◆

代々受け継がれ 心から人々を慰める

訳／朱家成・文／日本分會雙月刊編輯團隊（文稿提供／黃韻璇・楊雅穎・蔡鳳寶・林淑懷）

「善行を積んだ家庭には幸福が生まれる」という言葉の通り、見舞金の配布現場では、多くの家族連れのボランティアと経験豊富な先輩方が参加していました。この若い力と豊富な経験を持つボランティアたちが心を一つにし、誠意と思いやりの心を持って無償で支援する姿は、善意と愛の力を生み出しました。



■ 1 暑い中、ボランティア洪秀瑩(右)は、年配の方を日かけに案内した。写真/陳文縉

■ 2 ボランティアの林映美里(左)とボランティアの母の林秋里は初めて一緒に活動に参加しました。写真/劉奕男

『苦難を知り、幸せを知る』体験ができることに感謝しています。被災地の方々の笑顔を見られることが何よりの幸せです」と話しました。

林映美里さんは「初めての体験で、人生に新しい光が差し込んだようです」と語り、ボランティアの方々の丁寧で温かい対応に何度も感動して涙ぐんだそうです。

林秋里さんは「長年慈済の活動について話してきましたが、今回娘が参加してくれて本当に嬉しいです」と喜び、娘の参加のきっかけは「人から聞くだけでなく、自分の目で見てみよう」という一言だったと話しました。

若手ボランティア

慈済青年部の先輩である洪秀瑩さんは、アメリカ企業に

勤務する傍ら、日本人の夫との間に子供を育てています。多忙な中、時間を作って今回の配布活動に参加。記録係として活動し、出発前に子供の体調を心配しながらも、夫の理解と支援のおかげで任務を全うすることができました。

現場では写真撮影だけでなく、通訳や案内、被災者への心配りも行いました。八十五歳の横山豊恵さんが日差しの中で手ぬぐいを被っているのを見かけ、すぐに日陰へ案内したところ、「ありがとう」という言葉に胸が熱くなったと振り返っています。

中国蘇州出身の張奕澄さんは、今年三月に来日し大学院受験の準備中でした。友人の勧めで今回の活動に参加し、被災者の方々の涙を見て心を痛め、できる限りの支援をしたいという思いを強くしました。

るよう、活動がスムーズに進むようサポートしたい」と話しています。

真心こそが最も美しく、無私の奉仕こそが最も心を打つ物語です。国境を越えたボランティアたちの愛は、被災地に希望の光をもたらしています。全てのボランティアの献身的な努力は、きつと地域の人々の心に永く記憶されることでしょう。

梅恵

た。ある被災者から「地震の時、目の前で人が下敷きになってるのを見たが、余震で助けられなかった」という話を聞き、言葉を失いながらも「私たちの心が少しでも癒しになれば」と願いを込めました。

母親ボランティアの活動

来日三十年以上の土方理恵さんは、母が慈済の委員を務

めていましたが、仕事と育児で参加できずにいました。東日本大震災をきっかけに活動を始め、現在は正式な資格も取得。家族の支えもあり、能登での活動には全て参加しました。「自然災害は避けられませんが、私たちは思いやりの心で支え合えます。感謝と共感の気持ち、そしてこの地への恩返しを込めて活動しました」と語ります。

看護師の李月鳳さんは、明るい性格で知られ、東日本大震災時の活動をきっかけに慈済と出会い、現在は協力組長として活動しています。「震災での活動が私の人生を変えました」と語り、夜勤のスケジュールを調整して能登での配布活動に全て参加。記録係として活動する傍ら、必要に応じて案内係も担当し、「どんな場面でも必要な支援ができ



■ 3 慈済青年部の張奕澄(左)は、大雨のなか、車から降りてくる年配者に傘を差し上げた。写真/呉恵珍

■ 4 井田音心(前)、井田龍成(後)親子は(左)受付で地元の方にサポートしている、親子とも能登地震発生からずっと今まで、被災地の方々に貢献して来ました。写真/張美齡



■ ボランティアたちが皆さんに寄り添い。写真 / 陳静慧

2 ボランティア物語 ◆ 被災者に寄り添い そこには愛が有り孤独ではない

訳 / 真鍋誠・文 / 日本分會雙月刊編輯團隊 (文稿提供 / 陳静慧・施金魚・羅文伶)

見舞金は使ってしまったらなくなってしまう、しかしボランティアが被災者に伝えた、心からの寄り添い、善の心は被災者の心の中にいつまでも残ると信じます。

愛と関心を伝える：藤本市子

三重県に住む藤本市子さんは去年からボランティアの見習い研修に参加しています。

去年の年末、静思精舎で行われた七日間のボランティア活動では慈済の人のエネルギーで温かい心を感じました。彼女は静思精舎の師父達が自給自足の生活に苦勞をいとわず不平を言わない精神に尊敬の念を抱いています「毎日を楽しく過ごしました、言葉では言い表せません！何故慈済人はこの様に善良で温かいのでしょうか？」彼女は自分も何時か本当の慈済人になれる事を期待しています。

彼女は見舞金支給時、地元の被災者に真心を込めて寄り添いました。九十四歳の菊池おばあちゃんと交流した時、藤本さんが不思議に感じた事は、おばあちゃんはこんなに年がいていてそして自分の

住む家が全壊した事実にまったく落ち込んでいない事でした。藤本さんはおばあちゃんから湧き出るエネルギーを感じ、自分も励まされました。

地元の被災者と交流するうちに更に色々な事が理解できました。「災害見舞金の支給は被災者への経済上の支援だけではなく、更に彼らに真心を持つて寄り添い、励め、励まし、心の苦しみから救ってあげる事なのです」

愛はいたる所から来ます：

盧瑩恭・黄麗伶

盧瑩恭さんと黄麗伶さん夫妻は来日してから四十年になり、岐阜県に在住しています。初めて慈済活動に参加しました、深夜三時半に出発です、車に乗って四時間、活動会場に到着しました。盧瑩恭さんはお茶くみの担当です、何回かの練習後地元の被災者に積

極的に声を掛け結縁品を贈呈し熱いお茶を勧めました。流暢な日本語を話し、通訳も手助けしてくれます。黄麗伶さんは案内の担当です、彼女は中国語、英語の先生で長期に亘り子供たちと接してきた情熱家です、被災者の皆様を接待し、案内する事は熟練しています。初めて慈済ボランティアと接触した：「今日はこの様な活動に参加出来る機会に恵まれて光栄です、以前から慈済を尊敬し慕っていました！あなた方が私達に皆様を手助けする機会与えてくれた事に感謝します。」「私達と一緒に活動した事を光栄と感じ、とても嬉しかったです！」二人は皆様との再会を期待していました。

者の御主人と台湾から日本へ移住して来ましたが、二〇〇六年慈済の委員を受證しました。今回参加した活動は見舞金支給を担当しました、彼女は常時注意を促していました「見舞金は現金です、注意して保管して下さい、袋にいれて保管すれば無くす事はないですよ。」多くの人が見舞金を受け取った時、眼から涙を流していました、ある人は見舞金を受け取り、何か言いたそうで、すぐには会場を離れませんでした。

ある被災者が見舞金を受取って帰って行った、数時間後まだ会場に戻って来て「帰って見舞金を見たら、こんなに多くの現金で私は受取れません！」と言いつつ四万円を被災した人達の為に寄付しました。更に感動させたのはその被災者は昨日災害支援の為の募金を慈済に振り込んでいた事です。とても得難い善の行いで

す、心の中の善念を発揮し悲しむ人々を手助けする行動は被災者の心を打ちました。

七十歳の慈済ボランティア深恵美さんは三十六年前日本に嫁いで来ました。見舞金支給の活動を終え被災地を離れた、夜十時過ぎに京都駅に着き、ご主人は既に駅の外に迎えに来ていました。その瞬間、彼女は自分が何の憂いも無く、慈済の活動に参加できる事に感謝しました。

地元の被災者の無常を目の当たりにし、何とも言えない、どうしようもない感傷に襲われ、彼女は多く感じました。被災者の立場で考えます、彼らの生活は正常では有りません、経済面でも危機に陥っていて、生活上の心配だけでは有りません、心の中の苦しみを一体何処へ訴えればいいのかでしょう。短い間の接触でしたが誠意をもって接しました！彼女は家へ帰った後、常

に一人一人の被災者に電話を掛け「私は時々電話しますので、電話番号を覚えて下さい決して詐欺では有りません。」これは愛の問い掛けです、心の中に温かさを伝えます。

被災者が被災者を支える：

高田良雄・高田琳子・上野和子

「お早うございます！」案内組を担当するボランティアの高田良雄さんは元氣よく地元の被災者に声をかけます、そして先に立つて被災者を会場の入り口へと導きます。奥さんの高田琳子さんは被災者の見舞金支給の通知書と、被災証明書の確認を行います、高田さん夫妻はこの附近に住んでいます。彼女は「慈済の人が手助けに来てくれてとても嬉しいです！この被災者の方々は私の家族の様なものです、慈済の人が来てくれますか！」と言っています

愛のパワーを見て下さい：
王美玲・深恵美

一九七八年王美玲さんは医



■ 1 地元ボランティアの高田良負雄（中）は穴水町の炊き出しから参加し志賀町でも見舞金活動を手伝ってくれた。写真 / 陳静慧

■ 2 地元の土野和子さん（中）は、見舞金を受け取った次の日もボランティア活動参加しに来ました。写真 / 陳静慧



た、地震発生後高田夫妻は自宅被災者への炊き出しをしていました、二月に慈濟の人と接触してからは穴水町の炊き出しに参加する様になりました。

七十六歳の被災者土野和子さんは、見舞金を受け取った次の日ボランティアの深恵美さんからボランティア活動参加の誘いが有りました。土野さんは平日外出する時は送り迎えが必

要です、そこで土野さんは息子さんに相談しました、息子さんは土野さんのボランティア活動参加への車での送り迎えを承諾しました。「こんなに大きな恩を受けたのです、恩返しをするべきです」と鼓舞しました。土野さんは非常に情熱的で、会場の入り口に立って「台湾のお守りです、おやつも有ります、どうぞこちらへ」と親切に声を掛けていました。

を感じました。息子さんが迎えに来た時、ボランティアの人が息子さんに「あなたは親孝行ですね！おかあさんが一日楽しいボランティアを務めました」と言いました、息子さんは直ぐに「これは当然の事です、皆様本当に有難うございました」と応えていました。

若人の災害救助への感想：
高峻喆・王羿晴

「この数ヶ月は私の人生で最も忘れ難い記憶となりました！」高峻喆さんの故郷は中国蘇州です慈濟との接触は早かったです。十三歳から書軒でボランティアをしていました。

二〇二〇年中国から日本へ留学でやって来ました。当時彼は慈濟に接触したく日本分会の住所を調べました、そしてその住所に向かいました。日本慈濟の分会が見つかりました、彼は空いた時間を利用して活動に参加

もし被災者の方が間違えたら追い掛けて行って訂正します、彼女は台湾からの贈り物と祝福が被災者に行き渡り、漏れることの無い事を願いました。病氣と地震被災後に受けた心の傷がある土野さんは「私に勇気が湧いて来ました、ここへ着て本当に良かったです！」と繰り返し言っていました。

土野さんは台湾の事は全く知りません、しかし今回の事を経験し、ボランティアの人達を通じて他には無い親切と温かさ

しました、人文教室では子供達に付き添いました。

能登地震支援活動の第一回炊き出しの日、その日は大雪に見舞われ地面も凍るほどの寒さに襲われました、多くのボランティア達は大鍋でご飯を炊いた経験は有りません、しかし全員で協力し合い野菜を洗う、切る、ご飯を炊く等与えられた任務は必ず達成するという精神には非常に感動させられました「師姑達の菩薩心、そして皆家族のようつで、心が温まるようでした」その後彼は見舞金支給の活動に参加する機会を得ました。

見たところ見舞金を受け取る被災者は皆様年配者です、大部分の人が自分で来ていました、その中には杖をついてくる人もいました「この様な年になってこの様な大きな災害に見まわれるとは、思いもよりませんでした」ある一人のおばあちゃんは見舞金を受

け取った後泣き出しそうでした。おばあちゃんは出口から出た後振り向き内部に向かって深々とお辞儀をしていました。この一場面を彼はずーと心の奥に刻んでいます、他人を助ける事には福があります。

四月日本語を学びに大阪へ来た王羿晴さんは縁があて慈濟のボランティアと知り合いました。慈濟が能登災害支援で見舞金支給に出発するニュースを聞きました、運良く学校は三連休なのですぐ参加の応募をしました！彼は佛教家庭で育ちました、佛教小学校から高校まで仏法に陶醉しました、心の中には「利他」の精神を持っています。

見舞金支給時王羿晴さんは見舞金を受け取る地元の被災者を見ました、まるで私の家の中にいるおじいちゃん、おばあちゃんと同じでとても親切でした。災害を受けた人を見てはってはおけない思いで

した、幸いにも慈濟の人が寄り添いに来てくれました、そして彼らの為に少しの貢献ができた事が嬉しかったです。

参加して地元の方々に寄り添い、心の苦しみに耳を傾けます、無常を感じ、何事も大切にすると言う思いが一層強くなりました。生命の中の悲しみと苦しみを感じました、人には愛が有り決して一人ではないと言う事を知りました。

能登



■ ボランティアの王羿晴は、被災地に来て手伝うことが出来て、貢献ができた事が嬉しかったですと言っていました。写真 / 陳静慧

「竹筒の歲月」の精神を顕現し 善の種が播く愛を広がる

訳／王曉紅・文／日本分會雙月刊團隊整理
(文章提供／楊采蓉・張美齡・吳惠珍・潘翠微・小林由意・楊景卉・施燕芬)



■ 竹筒の歲月を紹介したあと、山下さんはとても感動して、直ぐに竹筒に寄付しました。愛の輪が広がって、ボランティアの中村瓊珠(左)は嬉しく思いました。写真/慈涓

能登での五回目の慰問金配布では、ボランティアたちの献身的な活動が、地元の人々に感動を与え、多くの人々が慈濟の活動に参加するようになりました。被災地の皆さんに温かい希望をもたらしました。

何も求めず最善を尽くす：中村省吾・中村瓊珠・山岸久美子

大阪から来た日本人ボランティアの中村省吾さんは、配布現場で会場内への案内係を担当しました。ある日、早朝から二千人以上の人が集まり、その中

でトラブルが発生しました。中村さんはすぐにみんなの前に歩み出て、頭を下げて「皆様、ルールを守ってください。お願いします!」と言いました。證嚴上人の法を胸に刻んでいた中村さんだからこそ、予期せぬ事態にも誠意と共感を持って対応できました。

中村さんと妻である瓊珠さんはともに五回の見舞金配布活動の全てに参加しました。活動中、彼女はよく膝をつき、跪いて地元の人々の世話をしました。彼女は助けを喜んで受け入れてくれた地元の人々に感謝し「人が傷つけば痛みを感じ、人が苦しんでいれば悲しみを感じる」という精神をそこから学びました。慈濟の温かく継続的な世話のおかげで、多くの人達が心から感動し、感謝を表す人を多く見る事ができました。

山岸久美子さんは元介護福祉士でしたが労災が原因で退職し



ました。見舞金を受けとった後、歩きながら泣いていた彼女に気づき、ボランティア達が座るように誘い、お茶とお菓子を出して話しかけました。彼女は二年前にご主人を亡くしてから一人暮らしで、無力感を感じていました。ボランティアは「家から出て一緒にボランティア活動をしませんか」と誘いました。その時、彼女は躊躇していましたが、翌日、勇気を持って会場にやってきました! 「自分の悩みを人に話すのは久しぶりです。あなた達の明るさが私を励ましてくれました。私も少しでも力になりたい、他人を愛するならばまず自分自身も愛さなければなりません!」彼女は新たな一歩を踏み出しました。

善の縁を結ぶ：小林由意・大橋美紀枝・梅津和子・竹下美穂

台湾で育った小林由義さんは中国語科卒業後、日本語を勉強

するため日本に渡り、日本で結婚しました。慈濟が能登の被災者へ温かい食事を提供している事を知った彼女は、現地へ赴き、白髪のボランティア達の活動に感動し、縁あって慈濟に参加しました。中国語と日本語の通訳に堪能な小林由義さんは、二回の見舞金配布活動に参加し、ケアチーム、人文報道チームに配属され支援を行いました。大愛テレビのインタビューの通訳にも協力しました。

七尾医院の陳文筆医師は、地元のかた約二十人へボランティアを呼びかけていました。そのひとり、八十歳を超えた梅津和子さんは地元の温泉宿で五十年近く働いていましたが、震災で職を失いました。彼女は、慈濟の制服を着て綺麗な髪を結って髪飾りをつけるボランティア達の姿を見て、この綺麗な団体とボランティア達の親切に良い印象を持って頂けました。梅津さ



■ 1 地元のボランティアの手伝いで、配布現場はよりスムーズに進行しました。写真/楊采蓉
■ 2 東京から来たボランティアと地元のボランティアたちとの結成で、受付チームがスムーズに対応することを期待しています。写真/慈涓



■ 地元のボランティア高岡園子さん(右)は、陳文筆医師から「竹筒の歲月」の物語を聞き、大変感銘しました。現場に見舞金を受け取りに来た方々に、その精神を告げて、愛の輪を広げています。写真/慈涓

んは被災地での慈済の見舞金の配布に大変感謝しており、特に台湾から来たボランティアの方々に深い感動を受けていました。ボランティアアベストを着て活動に参加した彼女は、少しでも貢献できる機会ができてとても幸せだと語りました。

の危機に気づき、資源リサイクルや海岸清掃活動などに積極的に参加していました。地域でリサイクルを推進したり、手工芸品を作ったりしています。彼女の理念は慈済とても一致しており「自分が一粒の善の種のようになり、歩いた足跡を広がつて、汚染された大地を清浄な土地に変える事を願っています」と話してくれました。

地元の佐藤文恵さんは慈済ボランティアのベストを着て、笑顔で地元の人達に慈済の物語を語っていました。彼女は花蓮で生まれ、彼女の姪は現在、花蓮慈済病院の看護師長を務めており、慈済にとても詳しい人でした。彼女は三十七年前に日本で結婚し、現在は七尾市でレストランを経営しています。この日、ボランティア活動のために店を一日休み、人々に慈善活動への参加を呼びかけ、愛の行動に参加するよういざないました。

地元で被災した高岡園子さんは七尾市婦人会のメンバーでした。彼女は二日間のボランティア活動に参加し、地元の方に見舞金の受取を促しただけでなく、ケアエリアで積極的に竹筒



■ 1 お母さんの代わりに見舞金を受け取りに来た熊谷勇氣さん(右)は、恩返しのため一緒にボランティアをしました。写真/慈涓

■ 2 現地のボランティア竹田八代枝(右)は、慈済ボランティアからいっぱい力をもらいました。写真/慈涓

を持って「ここに貯めていったお金は一万ですらありません！五十銭です。それでも良い事を成し遂げる事ができました。信じられますか？一人一人の小さな力で、大きな善行を成し遂げる事ができます。」と紹介しました。彼女は「とても感動したので、もっと多くの人に慈済ボランティア達の善行を知ってもらいたい」と話してくれました。

瓶子睦子さんは、家屋全壊で一回目の珠洲見舞金配布の時、見舞金を受け取った後、すぐボランティア活動に参加しました。そして二回目の見舞金配布の時、再び参加しました。当日、八時に会場に到着すると、すぐにボランティアアベストを着て来訪者の誘導を始めました。彼女は息子と共に美容室を経営しており、受け取った見舞金を息子に渡し美容室再開の資金に充てると言っていました。

能登町出身で、これまでに能登町や輪島市での配布に参加していました。今回で三回目のボランティア活動です。自宅も地震で被害を受けたものの、給付対象にはなかったのですが、富田さんは「慈済ボランティアが自費で来てくれた。日本人としてボランティアをするのは当然だ」と話されていました。

小さな善行はまさに一粒の善の種であり、この傷ついた土地に根を下ろし、徐々に地域復興の確かな力となっています。この配布は人々を助けるだけでなく、愛の種を植える事にもなり、それが大きな木となって芽を出し、より多くの人々に穏やかな木陰をもたらす事を期待しています。

正しく学んで悟りを得られるよう 精進して菩薩の道を歩みましょう

May we learn and attain awakening with mindfulness.
May we walk on the Bodhisattva Path with diligence.

鷲山中雲霧深，靈山塔下法音沉
當年法雨潤心地，今世精進正道尋

祈福感恩會

● 皆様のご来場お待ちしております

2025・令和7年

期日 1/19 (日)

時間 日本語の部
午前 10:00 (入場) 10:30 (開始)

時間 中国語の部
午後 13:00 (入場) 13:30 (開始)

場所 慈濟基金會 日本分會
東京都新宿区大久保 1-2-16
☎ 03-3203-5651

※ 交通案内：副都心線東新宿駅 B1 出口
地上出てから右へ徒歩すぐ

2025・令和7年

期日 2/23 (日)

時間 午後 13:00 (入場) 13:30 (開始)

場所 慈濟関西地区大阪連絡所
東大阪川中 4-27
☎ 0729-66-3180

※ 交通案内：大阪市営地下鉄中央線
学研奈良登美ヶ丘行吉田駅 ⑤ 出口 徒歩 5 分